
いちばんうしろの
大魔王
ACT12
水城正太郎

HJ BUNKO


いちばんうしろの大魔王
ACT12




「だから、あなたは何者かにはなれなかったんだよ……」
「さよなら……」


「なっ……何を……!」
「動くな。ヘムヘムなんだから、脱ぐのは当然だろ?」

いちばんうしろの大魔王
ACT 12

水城正太郎

HJ文庫

口絵・本文イラスト　伊藤宗一

目次


登場人物紹介
はっとりじゅんこ
服部絢子
阿九斗に恋する純情なクラス委員長。「色のない炎」によって焼かれてしまう。
さいあくと
紗伊阿九斗
けーなの支配下に置かれているが、必然的に戦争に関わることに。絢子を焼いた「力」に対し激しく憤る。
えとうふじこ
江藤不二子
阿九斗に忠誠を誓う黒魔術師にして薬物使い。真の黒魔術の再興を目指している。
そが
曽我けーな
日本の現皇帝陛下。世界のカギを握る存在？　果たしてその正体は？
みわひろし
三輪寛
阿九斗の弟分を名乗るトラブルメイカー。勇者ブレイブという顔も持つ。
ころね
阿九斗の監視と護衛を行なっていたが、けーなの皇帝即位後はその御側係に。いたずら好き。


きたよしえ
木多淑恵
魔王戦争の後、阿九斗のことを気に入り、協力する。
しらいし
リリィ白石
小粋な帽子がトレードマークの生徒会長。
マリン
共和国の王子。「無貌の力」を開放してしまう。
ノニモラ
マーライ族の族長。「無貌の力」を守る使命を担っていた。
さくらけい
佐倉啓
CIMO8の一人。阿九斗の細胞の一部を使い魔王化する。
ザ・ワン
CIMO8の一人。今回の事件の首謀者。その狙いは？
くらはしけんと
倉橋賢人
CIMO8の一人。「無貌の力」を利用しようとするが、ザ・ワンに出し抜かれる。

法律と倫理とは違うが、それを主張できるのは結局のところ人間だけだ。倫理によって法は定められるべきという原則は、理性的な人間によって支えられている。

倉橋賢人がそれを無視したのは、今まさに四日前に法律に違反する行為が行われたからに他ならなかった。

いや、そのような認識を抱けたのは、賢人は常人に比べて数段の倫理観を持っているからであり、普通ならば眼前の光景に硬直してしまっていただろう。

血は流れていなかった。外見も特に変化はなかった。だが、確実に彼女はその命を失っていた。

その美貌は保たれていたが、目は大きく見開かれ、その瞳孔は光を反射していない。筋肉が力を失っているためか、だらりと顎が下がっている。両腕は、身体から力なく下に垂れていた。彼女はまるで首吊り死体のように天井からぶら下がっていたのだ。

しかし、その細い首にロープはない。彼女は宙に浮いている。見えない力が彼女を宙にとどめているのだ。

死体の下には、一人の少女が立っていた。

彼女は、白いワンピースをまとい、晴れ晴れとした笑顔で死体を見上げている。

先程まで自分の義姉だったものを。

「ねえ、ちょっといなくなってもらったんだ。邪魔だったからね。だってさぁ、僕はほっておいて、自分だけ楽しもうなんて、許せないじゃない？」

――楽しもうなんて？

少女がこちらを振り返って言ったその言葉を、頭の中で反芻する。

死んだ、いや、殺された片山円子は、自分の恋人であり、少女が、楽しもうなんて」と言った時はそのこと

があるに違いない。一族の特性、成長期によくある自分の肉体の操作に対する、嫌悪だろうか？　いや、そうであろうとな

かろうと、これは、嫉妬に由来する言葉のはずだ。

——嫉妬？　嫉妬だって？

しかし、それがあり得ないことは、賢人はよくわかっていた。少女は、実父と少女としか見ぬ存在であるの

は、賢人と数人しか知らぬ事実だった。

佐倉啓。

それが、彼の名だ。

母を亡くした彼を、円子の家が引き取り、弟として育てたのだ、無論そこには純粋な善意だけではない思惑があった。

啓は異常なほどの才能を持っていた。魔術の才である。

マナは精神のありように反応する。だが、それはマナたるナノマシンが脳機能に反応するように設計されてい

というだけのことである。脳がどのような作用をマナにもたらすのかは、個人のイメージの持ち様と

るのだ。特殊な組み合わせの言語、詠唱のイメージが引き金となることもあるなど、未だ魔術の仕組みは解明されていな

い部分も多い。そのため、魔術の才能は個人の持つ天賦の才であるといって良い。

円子と賢人は魔術研究においてはトップクラスの「研究コンビ」であったが、その壁に阻まれて、ある点

には研究が進まなくなっていた。互いの研究成果を掘り尽くしてしまえば、新たな才能を探さないことには

どうにもならないのだ。

路西法は両親を早くに亡くし、その身を孤児院に預けられていた。院から引き取り教会組織の人間から連絡があったのは、まだ十せぬ年齢の、路西法が魔術を使ったとの報告を受けてのことだった。

実際に編み入った呪文、路西法は、誰からも魔術を学んでいなかったことを聞き取った後、器用に真似て行った。彼はマナを操り、大人の頭をおもちゃをぶつけたという報告を事実だったことを確認した。

その時、悪魔をささやいたのは、内なる声だったのか、異界の声だったのかは、本人たちにもわからない。裏から手を回し、路西法は教会の中で養育され、弟子として育てられることになるのには、時間を要さなかった。

路西法はすぐにその特異性を見せはじめた。オリジナルの魔術をいくつも作りだし、既存の魔術と同様の効果を持つそれを使た。独学も、必ず細部なんらかの変更が加えられていた。それも当然といえば当然のことで、彼は孤児院で来かの知識を持たないから魔術を模倣し、一切の模倣を許されなかったのだ。独自のイメージを育てるためだ。

ただし、その特異性は、生活のすべてにも現れてしまっていた。彼の振る舞いは自由で、それを周囲の大人は認めざるを得なかった。その才能こそが彼の価値であったからだ。が、その柔軟さを超えた奔放さは、やはり常軌を逸していた。中でも、治癒魔法を習得してからは、周りの者を傷付けては治すという行為を遊びとして行などがその一例である。

治癒魔法を生み出すためとはいえ、犠牲は大きかった。その後、指導されて嫌なことは拒絶もしてはいけないという程度の躾は施されることとなったが、すでに遅かった。路西法は自分の腕を切断してくっつけることなども顔色を変えずに行うようになっていただけだった。

彼女の価値は、自分の肉体のものの極限まで及んだ。いわば、自分に整形手術を施したようなものだ。彼女が成長するにつれて美しくなり、周囲は、外面的なものと内面的なものを併せ持った存在になるに至った。その美しさは、見る者を魅了せずにはいられなかった。見慣れている僕ですら、うっかりすると目を奪われてしまっていたし、自分もそれは同じだった。

このとき、僕達は気づいておくべきだった。自分で美しくなったのだから、その美しさを自分の都合よく利用する術が彼女にはあったのだということを。

彼女は少しずつ自由を獲得していった。もちろん、最初から段階的に教育を施していき、一般人と同じような生活に戻していくつもりではあったが、そのペースは予定していたよりも明らかに早かった。それどころか、明らかに彼女が自分の研究スケジュールを立てている節すらあった。

それでも、彼女の真の目的は不明だった。それ故に、彼女の思考の把握には数年を要した。研究所の死で、彼女の口から直接聞くまで何が起こっていたのかすら知らなかったのだ。

「姉さんとあなたが最後まで気づかなかったんだけど、僕はそうしていたってことは、気づいて欲しいってことだって。なんで気づかないのかな？」

矛盾したことを彼女は言った。

「何……を……だ？」

僕の質問に、彼女は笑う。

「もちろん、僕、研究スタッフ全員をヤッちゃってたってことだけどさ」

「やっ……。いや、つまり、それは……」

「他の人間は感じないね。僕たちは、みんなが想像しているよりも、魔術がちょっとだけ上手いってこと。相手の心を読んだりったりくらいできなきゃ、話にならないでしょ？」

余裕すら感じられる人物だった。

人族は、動揺した。その魅力にスタッフが翻弄されていることには気づいていたが、その関係までは考えが及んでいなかった。人族はそのあたりに疎いこともあるが、何より、スタッフに男が多とが理由である。

「まさか……」

「まさかってそんな。僕の知識なんて通用しないってば。だからこその僕のに」

「それじゃあ……」

「美しさに男女の違いはまったく関係ないでしょ？ そもそも、自然の状態なら、生まれた性が男でも女でも変わるのが当たり前。最前提させられたけど、男女の好みが変わるべきって、倫理観は後からつけたされたものにすぎないじゃない」

彼は妖しくくっ笑った。

「そもそも、僕は魔術を得意としているからって、カウンセラーくらいはできるはずでしょ？ 僕もマナを使ってやったのは、自分を綺麗にすることくらいかな。相手の心を読むこと、操ることは、昔ながらの魔術。つまり、マナを使うのでなく、精神干渉を心で読む、誘惑する。古い言い方だけど、恋の魔術っていうこと」

その問いの答えに、賢人は言葉を発せられずにいると、比呂はするりと賢人の首に自分の腕を絡めた。

「それが効かないのはあなただけだよ。そして、効果がないからこそ、頑張って落としてみたくなる。そういうものでしょ？」

賢人は震えた。生まれて初めて、心の底からの恐怖というものを味わっていた。

——怪物を生み出してしまった……！

しかし、恐ろしかったのは、そこではない。

その怪物に、興味や好奇心を覚えていることが恐ろしかったのだ。

——自分なら……いや、自分だけが、この怪物をコントロールできるかもしれないのだ。

「君の気持ちに、気づくことができなかったなんて……」

賢人は、比呂の手をとった。

悪魔との「契約」というものが実在したのなら、このようなものだったに違いなかった。

1　崩壊への時計はいつも無慈悲

モロックが一瞬にしてその余裕を失ったのは、傍から見れば明らかだった。

震えている。

冷や汗を流している。

そんな当たり前の変化が見られた。ただし、それは少し度を越していた。

汗が額から止めどなく伝い、その汗が震えにより周囲に飛び散っている。

手練れの魔王であるモロックをそこまで怯えさせているのは、彼の目の前にいる阿久斗だった。阿久斗は

まさに悪鬼。端整な顔であるだけに、ゆがんだそれは誰よりも恐ろしい。その顔に浮かぶものこそまさに殺意と純粋な殺気だった。

「僕は正面からお前を殺すに足る理由をなんとかひねりだそうとしていたのさ……それがいま、できた」

阿久斗がそう口にすると、周囲からマナが、ふっ、と消えた。ごく希薄とは言え、大気に偏り無く存在するのがマナである。それが消えたということは、阿久斗がそれを瞬時に自らの手の中に集めてしまったことを意味する。

「馬鹿なっ……！」

モロックは思わずそう口にしていた。

どれほど強力な術者でも、かつてそのようなことを行えた者はいない。マナを駆動(くどう)させるためのエネルギーは動かせても、マナそのものを動かすとなると、粒子(りゅうし)のひとつひとつを把握するような

が必要となる。

くいっ、と死刑囚が指を動かした。

それだけで、モーロックの身体が空中に磔(はりつけ)にされ、磁石に引き寄せたかのように、ぎゅん、と死刑囚の面前に移動させ

られる。

「殺さないでくれ！」

「殺さないで！」

ふたつの声が重なった。

ひとつはモーロックのもの。

もうひとつは、けーなのもの。

「殺さな……か。いい素材よ。殺さなくていいってのは、僕にとっても都合がいい」

けーなの横顔がほっ、としたかのようにゆるむ。

だが、修羅場(しゅらば)をくぐってきた経験のあるモーロックには、その言葉は死刑(しけい)よりも残酷(ざんこく)に響(ひび)いた。な

ぜなら、死刑囚の顔から微塵(みじん)も殺意が退いていなかったからだ。

「よ、よしてくれ！ 許してくれ！」

モーロックは声を嗄(か)らして懇願(こんがん)するが、死刑囚はそれを手の一振(ひとふ)りで一蹴(いっしゅう)した。

「許しを請（こ）うくらいなら、最初から他人を攻撃（こうげき）するなよ！」

叫（さけ）びとともに、モロックの身体が縮んでいった。元より身体の縮小を得意とするモロックであるが、今回のそれ

は、自分の意志によるものではなかった。

「や……やめてくれ！」

モロックの縮小。正確に言えば、隙間を縫う為に身体を小さくするものではない。身体の[illegible]を超えて、体内のマナで[illegible]るという

のだ。しかし、何者かがこれを乗っ取ったのである。

「うぎゃああああ！」

モロックの悲鳴が尾（お）を引く。その声が段々と小さくなっていく。

何者かの[illegible]モロックを封（ふう）じ込め、その身体をマナ粒（つぶ）ほどの大きさに圧縮したのだ。

まるで方眼紙のマス目を塗（ぬ）りつぶして書いたかのようなミニマムサイズと化したモロックは、声さ

あげることができなくなっていた。

「ひぃいいいいい！」

[illegible]モロックは叫ぶ。しかし、その声[illegible]は届かない。

今、モロックの目に見えるのは、ミクロの色のない世界のみ。あらゆる塵（ちり）が小惑星（しょうわくせい）のように浮（ふゆ

し、[illegible]突風（とっぷう）の[illegible]粘（ねば）りを持て[illegible]せてしまう世界にモロックはいた。このまま誰も[illegible]

できず、マナある限り[illegible]孤独（こどく）な世界[illegible]続けることになるのだ。

そして、モロックは恐るべき事に、ふわりと風に流れ、風の流れの中にもまれて、何処（どこ）へと消えていってしまった。

「あーちゃん……何……何したの……？」

けーなが不安げに聞いた。

「[illegible]閉じ込めた。体をミクロサイズにまで縮めて」

阿知花はそう言った。

口調こそ平穏（へいおん）だが、その言葉には熱が籠（こ）もっている。未だ怒（いか）りは醒（さ）めてはいない。

「あ……ちゃん……」

ぞっとしたような声をけーなはあげた。

それは、絶望と悲しさの入り混じった声だった。

「だ、駄目（だめ）だってば、そんなことをしちゃ……だって……」

「殺しちゃいない。言われた通りにしただけだ」

阿知花は冷淡（れいたん）に言った。

「そんな……そういうことじゃないって、あーちゃん！　あーちゃんならわかってるでしょ！　あたしに

そんな悪い事、いつものあーちゃんならしないのに！」

けーなが泣き声をあげた。

阿知花は目に狼狽（ろうばい）の色を浮かべた。

「だけど、こいつは絢子を殺した奴の仲間……！」

しかし、飛鳥の声は荒い。

けなは本音を発することができなかった。

重苦しい沈黙。

それを、不意にこころねが破る。

「復讐ならばそれでいいですが……状況は把握できていますか？」

囮であるころねは冷静だった。彼女の言葉は、飛鳥の内心が落ち着いているとはとても言い難い。確かに、状況すら把握できていない可能性もあった。

「状況？　わかってるさ。あそこにこの事態を引き起こした奴らがいるんだろうが！」

飛鳥に指示を出したのは、ザウンが乗っている飛行艇である。

そこにCIMO8の一人がおり、さらに異界の代表者も乗っているという程度のことは、飛鳥も把握できている。

その異界の代表者であるマリンが飛鳥のために力を使ったことも把握できている。だが、そこから導かれる結論は尋常な

ものではなかった。

飛行艇を襲って二人を倒せ。

それが唯一の結論だった。

怒りだけが彼女を突き動かしていたのだ。

「おおおおお！」

魔王は吠(ほ)えた。
竜王の蹴(け)り。
その一蹴(ひとけ)りだけで、風が巻き起こった。けなところねは顔を覆(おお)った。
「駄目！」
けなはそう言ったが、すでに竜王の体は、遥(はる)か上空にあった。
衝撃波(しょうげきは)を纏(まと)って、一直線に天空へと飛んでいくのが見える。
「皇帝(こうてい)陛下、魔王(まおう)の力を封じてください」
ころねが鋭(するど)く言った。
はっ、としてけなはうなずいた。
先ほどから感じていたが、皇帝は魔王、すなわち竜王の力を封ずることが可能なのだ。今までは必要に応じて解除するといったニュアンスでその力を使っていたが、今回だけは封ずることで役に立ってくれるだろう。
「皇帝として、その魔王の力を……」
叫ぶけなであるが、その声は最後まで続かなかった。
戸惑(とまど)いの表情で、自分の手を見つめた。
「……どうしました？」
ころねが問う。
「あ……あれ？　で……できないよ？」

試験の時はあった、はずの感覚が戻ってこない、といった様子で首を振る。
「できない、のですか？」
さすがのころねも聞き返す。
「え……嫌よ！　こんなときに必要なことなのに……えいっ！　えいっ！」
けなは何度も手を振った。しかし、できないものはできなかった。
「魔法の力が使えない……？」
ころねはつぶやいた。その言葉は単なる疑問ではなく、魔法の力の源がなんであるかを考えた上でのことだった。
——純粋な力。
それは、マナとは無関係に存在する「意志力」とされている。おそらくは、人体の生命エネルギーそのもののことだ。
それが使えないということは、けなが純粋な力にアクセスできていないことを示している。それが内面的要因によるものなのか、外面的要因によるものなのかはわからないが……。
「どうして……。あちゃんを助けたいのに！　今だけでも助けなくちゃいけないのに！」
けなの叫びもむなしく、円盤状の飛行体は到達しようとしていた。大量の弾エネルギー弾とともに、飛行船から円盤状のぐが、円盤はそれをものともしていない。
円盤形の飛行体の何個か、大きく煙が立ち上った。
円盤状の飛行体はあっさりと、円盤の装甲をぶちぬいていた。

○

マリンは驚愕（きょうがく）していた。自らが招いたことの結果、である。

確かに絶対の力を有する権能は機能した。だが、その結果がこんなことになるとは。

核兵器（かくへいき）を阻止（そし）するために使用したはずの力だった。だが、それが帝国（ていこく）の一部地域諸共跡形（あとかた）もなく消し去ったのである。

「絶対の力は、破壊の願望を強く反映する。国王の欲がそれを強く願ったということだ」

ザワンが告げた。

人の本心を理解する犬という見かけだが、その言葉には兵を殺す力を持った魔術があり、人の本音を暴くのだという彼は、まさに悪魔の遣（つか）いだった。そのような結果になることを予測して、マリンに絶対の力を使うように仕向けたのだから。

「謀（はか）ったな！」

マリンは叫んだ。

しかし、ザワンは笑みを返す。

「ははは！　人に絶対の力を与（あた）えれば、どれも同じ結果になるというだけのこと」

「それを謀略（ぼうりゃく）と言わずしてなんというか！」

マリンは、この一瞬にして、ザワンとの交渉（こうしょう）をあきらめていた。

このっ大ところの顔面へ拳を叩き込むべく、身体を動かそうとする。

が……。

——何故！

マリンの身体はぴたりと止まっていた。前進はおろか、拳を振り上げることすらできなかった。まる

でどろりとした重い泥の海につかっているかのように、身体が動かない。

「はは！」

ザウンは笑う。

「催眠術のようなものさ！　君を助けた時に仕込ませてもらった。君は私に攻撃することだけはできな

い。君みたいな強者に対する時の用心をしておくのは大事なことだからね」

「まさか、インプラント……！」

魔道技術によって脳の働きをコントロールするようなことは、まず不可能であるが、例外がひとつだけある。

マナが自分の限界を超えた力を発揮する体内の装置をインプラントしてしまうことだ。

「察しがよろしい。その通りだとも。完全に意志を奪うわけにはいかないからね。何しろ、君は自身の限界を超えた力を使て

もらわなくてはいけない」

「くっ……」

マリンはうめく。

「……まだ私たちに力を使わせようというのか！　すでに世界の崩壊は避けられないレベルにまで来てしまっているというのに……」

「確かに世界の崩壊を引き起こすまでは成功した。だがね、まだ先を見ているのさ、こちらは」

ザワンは笑う。

「まだ先がある……だと」

マリンもさらなる怒りに顔をゆがめる。さすがに世界の崩壊以上のことを企んでいるなど、考えてもいなかった。

「そうさ。思いも寄らぬ手法で世界を滅ぼしてやろう。そのためにこそ、魔法の力を使われ続けなければならんのだ……。君たちの民には頑張ってもらわなければ、ね」

ザワンは冷酷な言葉を言い放った。

と、そのとき、轟音が鳴り響き、後方の魔法障壁が何かに砕けた。

「何事？」と、ザワン、マリンともに表情が変わる。

圧倒的な力より突き込んできた魔法の破片と煙の中から、ゆらりと姿を現した。

その者は通常ではとても考えられぬ異形。ザワンもマリンも一言も発することは出来なかった。ほぼ警戒されている中で、幾多の魔法障壁を、幾重もの壁を魔力で突き破り、外からゆっくりと歩み入ってくる男など、異常な存在としか言いようがない。

男はやがて口を開いた。

「解除不能」

声は低く うなるように響いた。

それは マリンをして心胆寒からしめるものだった。一方で うっとりと見惚れてしまうかの
ような優越感に襲われてもいた。強大な力の持ち主は 程度を越えると魅力的になってしまうものだ。

それは ザウンにとっても同じだった。

「死を運びに来たか 呪われし者よ！」

ザウンは叫び、その声は怒りと いくばくかの賛美が混じり合っていた。

しかし ザウンの精神は怒りと焦燥に突き動かされた苦しみが行き交うそれだった。蓬莱の玉の枝をくわえると の

寝床のような狭いコクピットに素早く飛び乗ったのである。

「貴様の面倒を見てやるほど 耄碌はしていない！」

ザウンの言葉と同時に コクピット全体がシャッターで閉ざされた。その向こう側で 風景が変化した気配がする。コク
ピット全体が飛行機械となり射出されたのだろう。

いつもの死闘であれば ザウンを追ってシャッターを突き破ったことだろうが このときの彼は
は言い難かった。

その動き出しに 躊躇は無かった。

「貴様も仲間か！」

何も考えぬ 突進からの一撃が マリンを襲った。

マリンの手が動く。四人の攻撃を受け流そうとするも、それが不可能なほどの攻防が怒濤のように押し寄せてくる。

咄嗟にマリンは無数の光の力を使っていた。

凝縮されたマナの光。それとは違うまばゆい光が、四人の人間を弾ける。

「くうっ！」

「ぐっ！」

うめき声を上げ、四人は距離を取る。

まだ四人の人間の周囲には黒い気配が漂っているかのようだった。

「その……力！　その力が仲間を殺したか！」

四人の男が声を荒げる。

「この……力……」

マリンは戸惑い、自分の手を見つめた。マナとは違う力。だが、それは確かに今、戦闘に使用した。これは、四人の仲間の一部を焼き尽くした力と同じものだ。

無数の光の力。

四人の男達は恐怖よりも動揺。凄まじい破壊をもたらす謎の力。

そして、ザウンが「大いに使うべし」と促した光の神秘の力。

、今それが自分の意思で動いたことを、確かにマリンは感じていた。阿修羅に対する恐怖心と防衛本能がそうさせたのだ、とか
ら理解できた。

「その悪意で殺したのか！」

阿修羅が吼えた。

どうっ、と気その力が高まる。それは咆哮の際の圧力となって、阿修羅の身体から発せられた。

球状に拡がるマナである。それが、阿修羅を中心に、まさに弾けた。

「ぐおっ！」

マリンは、再度魔法の力を使ってしまっていた。そうしなければ、衝撃波に身体を引き裂かれてしまっていたに違いない。

その証拠に、結界は内側からドンッ、と破裂したのである。

それにどれほどの衝撃が加わったのか……。マリンは考えたくもなかった。[illegible]りわずかに劣る程度である。それが内側から風船のように弾けたのだ。

もっとも、それはマリン自身も考えることだった。魔法の力場、それを易々とシールドしてのけたのだ。

魔法の結界が破れて飛び散り、その欠片が周囲に落ちていく。

天井だけが爆発の中心にありながら、その姿を保っている。

マリンは、魔法の力に新たな恐怖感を抱いていた。

阿九のマナと、マリンの無限の力が拮抗していた。今、マリンには確かに阿九と戦うだけの力があった。これがなければ死んでいただろうが、ここまでの大きな力が代償を伴わないとは考え難い。それに、ザウンの言葉があった。

「やめろ！　君が私と戦うべきではない！」

しかし、マリンは、そう叫んだ。

それでも阿九は止まろうとはしなかった。

「おぅ！」

吼えていた。

交差する。

冷静さを失っていないマリンにとって、パワーはともかく、阿九の交差をかわすのはさほど難しいことではない。

しかし、マリンは、それを受け止めた。

「ぬぅ……！」

マリンは正面から阿九とぶつかり合う。

二人の力がぶつかり合い、炸裂音が発した。

手痛い一撃に顔がゆがむ。

が、阿九は勢いを殺すことなく、そのまま拳を撃ち込んでいた。

「おおおお……！」
数多の拳がマリンに降り注ぐ。
しかし、マリンはここでもそれを正面から受け止めた。
しかも、無限の力を使わず、自分の、マナの力のみで、である。
「があ……っ！」
マリンはうめく。
マナを込めた腕でガードはしている。が、その腕は無限の力が込められていた。
瞬く間、その腕とんでもないダメージが蓄積されていく。
「これが、君の怒り、そして、恨みだというのか……」
マリンはうめいた。
これは自分を罰する行為なのだろう……と、マリンはおぼろげながら自覚していた。無限の力は、
にがもてあそんでよいものではないのかもしれない……。
そのマリンの様子、無限の拳が一瞬、止まった。
「どういうつもりだ……」
無限の問い。
「いや……。無限の力、冷静さを失ってよいのは、自分の恋人が殺された時のみだ。そして、今の君はおそらくは
そうなのだろう。だが……君自身を、背負うほどの男だろう。それならば、冷静さを取り戻すまでは

られるのが、君と対話したい者としての礼儀」

マリンの言葉に、男は静かに息を吐き出した。

それでも、怒りが消えたわけではあり得ない。

拳を振り上げ、叫ぶ。

「それなら、ガードせずに受け止めろ！　一発で終わらせてやる！」

理不尽。

だが、説得力のある魔人の言葉。

マリンは思わず、腕のガードを下ろしていた。

「っく……………！」

覚悟をしていた。これが最後の一撃になるとすれば、それでいいとも思っていた。それが騙されていた自分への罰でもあると。

が……。

予測していた結末は、訪れなかった。

「だめだぞっ！」

高い声。するり、とその人間が滑り込んできた。

男の拳が止まる。

マリンが身体を硬直させる。

それは、誰にも、まるで予測できないことだった。それだけに、きわめてすんなりとその人の虚を衝いていた。

ノニモラがその人の間に滑り込んでいた。

そして……。

気が付けば、キスをしていた。

「な……」

その唇に感じた柔らかさが、自分の全身から力を奪っていた。

自分から怒りの炎が消える。

マリンもその異常な感覚に溺れる。

と……。

ノニモラはくるりと空中で一回転、マリンの唇を奪っていた。見事な早業であった。

「熱くなるなよ、男ども」

マリンから唇を離すと、ノニモラは両手の人差し指で、ぴしり、と制した。

「喧嘩を止めるには、ムチュ、ムチュ、が一番ぞ」

気が付けば、マリンの方は、あまりのことに、度肝を抜かれていた。

早くも立ち直ったのはマリンだった。性格という点で、何よりも優っていたせいだろう。

「わかってくれ、話をしたいのだ」

マリンは言った。

阿九丸は殴りかかる機会を失っていた。再びマリンを見返す。

「落ち着くべきだぞ。無知の者の力が悪しき心で動いたとき、悪しき力となる。どこの誰が悪しき心を持ったかが大事なんだ」

ノニモラの言葉を聞いて、マリンの表情が変わる。

「聞いての通りだ。君の怒りはわかる。だが、それは我が民に対しての怒りだ。私が許さなくてはならないのも、その点だ」

半ば独り言だったかのような表情で、マリンは言った。

「民の怒り……だと」

阿九丸は冷静さを取り戻しつつあった。そのせいで本来の勘の良さが戻って来ていた。そして、その言葉が何を意味しているかを悟りつつあった。

「まさか、人の憎しみの心が大地を焼き尽くしたというのか？」

阿九丸は聞いた。

静かにマリンはうなずいた。

「おそらくは……」

マリンの表情の意味が阿九丸にも理解できた。

「くっ……」

阿九丸は何処とも向けられぬ怒りに、歯を食いしばる。

「俺の親父の力……みんなの無意識も働いんだぞ。それを解放してしまった王子も、もちろん責任はある」

ノニモラがきっぱりと言った。

マリンはうなずく。

「私は人民を信じた。それを愚かというなら、それでかまわない。取り返しのつかないことをしたとは思う。だが……一方で核から地上を救いもした。それは……わかって欲しい。良い方もあった……のだ」

阿丸は首を振った。

「わかれ、と言われてわかるものか……。だったら、誰が何をどうしてくれるって言うんだよ……」

「良い方が悪い方を上回ることを……期待するしかない」

マリンは、自分も信じていないかのような声で言った。

。

「あっちゃん……」

けっなは空で行われたことの一部始終を地上から見ていた。

もちろん、ノニモラが阿丸にキスしたことも。

状況からいって仕方ないこと、と理解してもいたが、どうしても胸が痛む。
阿九郎を落ち着かせるためのキスの時間中、何より否定ありたかった。その絶対的な他人に奪われてしまったこと
に、思ったよりも……ショックを受けていた。
「あの時間のあとで、締めときましょうか？」
そう言ったのは、脇に立っているところねである。それは彼女なりの気遣いというところなの
だろうが、けなには笑えなかった。
「締ちゃダメだよ……？」
「そうですか、残念です」
「残念です、じゃなくてね……」
けなは、ため息をついた。
そこに大空から天女が降りてきた。
陰鬱な雰囲気を周囲に発散している。
阿九郎マリンは口を引き結んでおり、ノニモラすら険しい顔である。
「あちゃん……」
けなは降りてきた阿九郎に声をかけたが、阿九郎は軽くうなずいただけだった。
「これからザウンを追うのですか？」
ところねが聞いた。

これには阿丸も口を開いた。

「そうするしかないだろうな。[illegible]の玉は彼に奪われたわけだし。あれがないと神獣の力を封じることもできない」

阿丸はちら、とマリンを見た。

マリンはうなずきこそしなかったが、阿丸も同意した。

「そうするべきだと思う。早急に神獣の力を封じられなくてはならない」

「あれだけの力を使えるのに……か？」

疑問の目を阿丸がマリンに向けた。マリンの戦闘力は、神獣の力を使えば阿丸と互角だったのだ。

がマリンは再度阿丸に同意した。

「封じるべきだ。自分自身も力として使われることを民は期待してもいるが……。ザウンがこう言い残している。

いも寄らぬ形で世界を破滅してやろう。そのためにこそ、神獣の力を使い続けなければならんのだと」

マリンの表情は真摯だった。阿丸も表情をゆるめないが、言葉にしては否定する。

「ならば、ザウンを追おう。そして、[illegible]の玉を取り戻し、神獣の力を封じよう」

「それは私も協力しよう……。だが、問題がある。私は、ザウンを攻撃できないようインプラントがなされている」

マリンは申し訳なさそうにこう言った。

「インプラント？」

それについて詳しくは知らない既知の関係を口にする。

と、ころねが答えた。

「体内に機械を埋め込むことで、接続者からマナをコントロールしてしまう魔術系統です。かなり厄介ですよ」

そう言って、ころねはポシェットからレントゲン写真を取り出し、マリンにかざした。

「ちょっと透視させてもらいますね」

スピード・ガンのような形状をしているレントゲンの写真のモニター部分に、マリンの体内部が映し出されている。メ

の錠剤大の小さなカプセルのような物体のシルエットが。

「この部分の詳細を使えば、インプラントそのものの機能を無効化できます。しかし、精神的な危険性が伴う可能性があるかと」

ころねは説明した。インプラントの中には、自己防衛のためにも、外部からの接触に対してトラップを仕掛け

ているものが多い。そうなれば、それよりも精神に影響を与えるような

術を仕掛けているものがより危険とされている」と

「いんぷらんとなら、なんとかなるぞ」

近くで聞いていたノニモラが言った。

「どういうことですか？」

ころねが聞くと、ノニモラは自信ありげにうなずいた。

「昔からいんぷらんとは村に伝わってきたぞ。もちろんそれを取り除く方法も」

「そういえば、この村は古くから独特の技術を持っているのでしたね」

「そっちではもうやってないのか？　トラップはヘムヘムしながら取り除くと補修を受けにくい
のだ」
ノニモラは胸を張った。
「それはまさに一石二鳥ですね」
ころねは納得したように言った。
「じゃあノニモラがやってやるぞ！　そこのいい男こっちへ来い！」
ノニモラはマリンに案内を
妙にあっけらかんとしているが、ヘムヘムというのがアレのこの世界特有の表現であることを知
ちも知っている。
「大丈夫なのか？」
疑問に思ったマリンが問うが、ノニモラは真面目な顔をしていた。
「大丈夫なのか？って聞くのも大変だぞ。ノニモラは大真面目だ。もっとも祭りでもないのにあんまり
に見るものじゃないから、そこの茂みに行くぞ」
「え……ちょっと……」
呆れたマリンも戸惑いの声をあげていた。
しかし、ころねとノニモラは二人でマリンを左右から挟むと、彼女を茂みの向こう側へと連れて行く。
「いずれにせよインプラントが取り除かれるなら従うが……」

マリンは困惑しながらもそう言った。
そして、ドアの向こうへと彼は入る。
見向けなは、残されてしまってどうしていいものかわからない。
誰も不真面目（ふまじめ）なことはしていないはずなのに、この状況はどうにも間が抜けている。
一人、気が抜けてしまって、その場に座（すわ）り込んだ。
ドアからは、声だけが聞こえてきていた。
「インプラントの接続などのタイミングで？」
「精神へムへムに集中されたときだぞ。その時は特に頼（たの）むぞ」
マリンはヘムヘムが何を考えているかは知らない様子だった。
「ヘムヘム……？」
「知らないのか？　まあいいや。おとなしくしているんだぞ」
やがて、マリンの驚（おどろ）いた声がドアの向こうから響（ひび）いてきた。
「なっ……何を……！」
「動くな。ヘムヘムなんだから、脱（ぬ）ぐのは当然だろ？」
「脱ぐ……？　何故（なぜ）」
「だから、ヘムヘムだと言ってるじゃないか」
「っと……、だからといって、ズボンを脱がすのか？」

「もうちょっと協力してくれないか？ ヘムヘムは大難儀ぞ」
ノニモラのあっけらかんとした声に続いて、マリンの驚愕の声
「なっ、ヘムヘムとは……まさか……！」
「ヘムヘムはヘムヘムだってば。おとなしくしていろ。いんぷらんとを抜いてやるから」
「しかし、それとこれとに何の関係が……」
「だから、精神を集中させることに意味があるんだぞ」
その言葉に納得したのかしていないのかわからないが、ともかくマリンの体は大人しくなったようだ。
「しかし、私は王子……」
「いいじゃないか。男それは減らないし。したかしないか他人にはばれないぞ」
「だが、君の身体が……」
「ノニモラは健康体ぞ。病気もないぞ。それとも、そっちにはあるのか？」
「いや、ない……が……」
「なら大丈夫だ。ノニモラはポンポンにもならない日だしな。さて……あれ？ あんまり
バキバキじゃないな」
「そ、そりゃあ、こんな状況で……」
「手を離せ！ それは失礼な行為ぞ。ちゃんとノニモラが準備してやるから、有り難く思え！」
「ひゃ……うわ……」

それから、ごそごそという密(ひそ)かな音。妙にくぐもったささやき声が聞こえてくる。

「タイミング合わせはどうやって？」

「本人から言ってもらうしかないぞ。鳥肉のときにいんぷらんとを抜くんだ」

「鳥肉のときに？」

「ドップドップのときに決まってるだろ」

そんな声を聞きながら、床に座り込んでいる阿丸の顔には、苦笑しか浮(う)かんでこない。一遍(いっぺん)に雰囲気(ふんいき)が変わってし
まった。

「なんだろうね、どうも……」

阿丸がつぶやいた。

これもノニモラの持つ特性なのかもしれない。先程(さきほど)もノニモラには助けられた。彼女が間に入ってくれ
なかったならば、自分はマリンを殺してしまっていたはずだ。

「ねえ、あちゃん……」

隣(となり)から声が聞こえてきた。

けなが身体を阿丸にもたれかけていた。

「どうしたの、さ？」

「だって……」

もじもじとけなは身体をよじる。

み茂から、艶めかしい吐息と、一定のリズムでガサガサと音を立てる衣擦れが聞こえてきた。静かにつ

ていると、嫌でも耳に入ってくる。

「だって、と言われたって……その……さ……」

阿兄は言葉を濁す。

と、けなが動いた。腕の中の阿兄の体をまわし、顔を上げると、阿兄の目をのぞき込んできた。

「あちゃん……」

けながそう言って、唇をすぼめた。

阿兄は、その意味を理解できた。ノニモラのこともある。けながどうして欲しいかは、ずっと前から

わかっているはずだった。

しかし……。

いつもなら安心感のあるけなの体温が、今の阿兄には、どうにも重いものに感じられていた。それは、モロ

ックの件で、けなの意志を裏切ったことへの後ろめたさのせいでもあるし、変るもう一人であるところ

の自分がいなくなってしまったことも、心に引っかかっている。

けなが目を閉じた。

み茂からは、嫌でも意識せざるを得ない、甘い声が響いている。

状況に流れてしまっているようで、けなのどこか物欲しげな顔に、阿兄は何故か抵抗を感じてしまう。

「違うんだよ」

何を言ったのかはわからないが、そう口をついて出てきた。
と、けなは哀しげな顔になり、口を開いた。
「ごめん。でも、その……」
少年は首を振る。
すると、けなの手の中で何かが弾けたような音がした。まるで、シャボン玉が微かな風に吹かれたような音。
少女は少し驚いて、けなの目を見返すと、そこにあったのは群青色の瞳だった。
「哀しい、とても哀しいことになるでしょう。あなたの過ちは、ずっと彼女らのもの」
その静かな声は、闇と覚悟があった。
周囲はそう自分のことを呼んでいたはずだ。
「けな？」
「あなたがそう呼ぶ彼女は、私であり私ではありません。特に、今は」
少年の呼びかけに、彼女はそう答えた。
「どうして、今出てきたんだ？」
その質問に、目の前の少女は哀しげに答える。
「彼女の心が耐えられなくなったから……。それが一番真実に近い答えでしょうね」
「でも、僕は……」

阿九九は思わず反駁（はんばく）していた。
しかし、阿僧祇は続けた。
「これは、あなたの過ちです。これまでも、そして今も。あなたはほんのわずかに間違（まちが）い続
てきた。己を私に委（ゆだ）ね、そして、人の思惑（おもわく）に抗（あらが）いながらも、本流には抗わなかった。その結果がこ
れです。願わくば、決して過たぬことを」
責めるでもなく、詰（なじ）るでもなく、ただ淡々（たんたん）と事実を述べるように彼女は言った。
それが何を言っているのか、阿九九にはわからなかった。いや、わかりたくはなかった。いささ
か唐突（とうとつ）ではあるものの、自分の罪について語っているに違いないからだ。
阿僧祇の中で眠っていたそれは、今まで何度も阿九九を救ってくれた。大和望一郎（やまとぼういちろう）が阿僧祇の儀式（ぎしき）を行おうとしたとき、そ
して、日向ゼロと兵吾が取り残されたとき……。だが、今それは突然（とつぜん）に現れて、阿九九を詰問（きつもん）している。
「過ち？　僕は、流されていたなんて思っていない。それに、僕は日向君のことを救い出すようなものだと思
て……」
「それが過ちなのです。あなたが拒否（きょひ）してきた、虚偽（きょぎ）の物語……。それが偽りであるならば、私は救い出
るという物語もまた偽りのはず。そう、それは私にとって過ちにすぎません。阿九九の存在を否定するほどに強い物語でなければ、それはすべ
て過ちなのです」
冷淡（れいたん）に阿僧祇は言った。
「な……」

おぼろげながら、阿戸川はその意味を理解できた。だが、そうならば……そういうことな
ば……。
「教えてくれ。僕はどうしたらいいんだ？」
「それは誰にもわかりません。ただ、過ぎ去った時だけが過去を教えてくれる。生命はそれだけなので
す。大きな力は大きな責任がある。それは、人の世のこと。大きな力の個人の好きに玩んで良いというの
です。ただし結果だけは常に存在する」
「冗談じゃない。それは無責任じゃないか。まさか、君だけが神とでも言うつもりか？」
「いいえ。私は、自我はじまり。その最初で点す。時の最初から存在するが故に、多くの過去を見てきました。そ
の私も正しさはわかりません。ある者が欲するものだけが正しさのすべてとなるのです」
っ返てきたのは絶望的答え。
「僕の、僕のせいだけでいろいろなものを失ったって言うのかい？」
「そうです。それでも、今まで道に何かを続けざるを得ません」
「そんな……！」
阿戸川は絶句した。
そして、もう彼が言うことは何もないのだ、と悟った。
けなの瞳の色が消えた。
元けなに戻っていた。

ばつが悪そうな顔のマリンと、妙にさっぱりした顔のノニモラが戻って来た頃、けなは哀しげな表情

まで、虹を見つめていた。

２　やがて死ぬべき命について

戦況は最悪となった。

[illegible]して状況を見守っている木多淑恵と服部ゆう子は、この帝国において、全体の戦況を把握できている数少ない者のうちの二人だった。

《[illegible]全滅！》

《九州、都市部が燃えはじめました！》

《四国[illegible]りません！》

《東部方面、増援を願います……！》

次々と絶望的な[illegible]が飛び込んでくる。

原因はわかっていた。絢子を巻き込んだあの爆発――いや、あの炎が各地を襲っているのだ。すなわち絢子の能力である。

「ブレイブの[illegible]ら、絢子の能力はおそらく[illegible]」

淑恵がつぶやく。

「それがどうして国を焼いているの？　そんな力あっていいわけないじゃない！」

もはやとめどなく涙を流しているゆう子が叫ぶ。

魔法少女は、しかし、首を振った。
「もし、火の意志が叶う力があったとしたら、それは他の何よりも破壊に向けられてしまうはず。もちろん、貴方の能力は細胞に向かうはずだけど、別の能力があっては……」
「だったら、どうすればそれを防げるの？」
魔法少女は、眼前にあるコンピュータのキーを叩き、状況を分析する。
ほぼ悲鳴になった、たゆうの子の声が響く。
「その力は、超常のものではない。人間の内から現れる熱。あの色のない炎の正体。つまり人間の感情のように、[illegible]
制御できる力があれば……」
《帝都湾岸は、魔法少女の攻撃を免れました。魔王です。魔王の魔力が敵を押し返しています！》
通信がそう告げた。
「そう、魔王はその力が……！」
「でも、その魔王って、阿久津君じゃなく……」
「まさか、佐倉啓……！」
二人は、顔を見合わせた。
○

そのまさかだった。

咲は只(ただ)一人で戦局を押し返していた。帝都(てい と)の防衛線を。

宙に浮き、神々(こうごう)しいとも言える光を湛(たた)え、海から押し寄(よ)せる敵艦船(てきかんせん)を一隻(せき)、また一隻と葬(ほうむ)っている。その

姿は、天使というよりは、審判(しんぱん)を下している神の使徒のようだった。

「僕も帝都を守るなんて、甲斐性(かいしょう)があるとは思っていなかったなぁ」

咲は独りごちた。

咲の放つ力より、天空から降ってくる色のない炎が、スクリーンを張って遮(さえぎ)り、残った一万の艦船(かんせん)を沈(しず)める。

簡単な作業ではないが、今の咲は、それが可能だった。

「最高に冴(さ)えているからね、今の僕ってば」

しかし、その咲でさえ、理解不能であろう相手が海上からやってきていた。

「つつぅ……まいったな。まさかこっちに来るなんて」

咲はつぶやく。

その視線の先にあるのはブレイブ。ミサイルのように海面すれすれを咲に向かって飛んできている。

。

「[illegible]ド」

《了解。天竜モードに移行します》

ブレイブの周囲のマナキャンセラーが起動する。さらに、周囲のマナを吸収する機構が作動しはじめる。

「この状況なら、圧倒的にこちらが有利」

ブレイブ――三輪ヒロシは、そう語りかけた。虚勢を張ってではない。両者の距離は百米ほどに、すでに互いに接近していた。

「知ってるよ。だけど、どうして僕を襲う？」

少女は笑みを浮かべた。

「邪魔になっておいて何を！」

ブレイブは剣を――空中で交錯する。

少女はすんでのところでブレイブの突撃をかわしている。

「いや、それでも自分の身を守っているじゃないか」

少女の言葉は、余裕がある。だが、その動きは慌ただしいものだった。

スクリーンを展開。艦艇からの攻撃を無力化。さらに、ブレイブから逃れる。

いかに少女といえど、ブレイブの攻撃だけはかわすのがやっとなのだ。

「だが、本気で殺している！」

無数の光のブレードが少女に襲いかかる。

少女は一瞬で後ろへ飛び退け、それをかわした。

ブレイブから一定距離内であっては、マナは一切働かない。それほどまでにブレイブのマナキャンセラーは強力だった。そのため、賢者もブレードを受け止めるのは不可能なのだ。

「世界の悲願は世界の壊滅じゃないか。それを止めようとして何が悪い」

賢者は挑発するように言った。そして、ブレイブから一定の距離において、賢者はくるくると空中を舞う。その姿は美しいが、ある種の妖艶さを醸し出してくる。蝶のような、禍々しさを備えていた。

「その先に何があるってんだよ！　お前自身もその後に死ぬんだぞ！」

ブレイブは叫んだ。

そこに返ってきたのは想定外の答えだった。

「知ってるさ。そのくらい。ザウンが僕をただで蘇生させるわけがない。僕はインプラントが埋め込まれているだろうね」

「なんだって！」

それを始めから知っていたことに衝撃を受けるブレイブだったが、続く言葉はさらに衝撃的なものだった。

「僕は世界を滅ぼすために動いている。だから、事実上のは滅ぼされる運命。最後は自然ながら僕って死ぬさ」

平然と賢者は言ってのけた。

ブレイブは、その言葉を飲み込み、改めてその世界の意志を認識した。そして、自分のすべきことを再確認する。

――比呂のことを早急に殺さねばならない。

「それなら早急に退場してもらうぞ！」

、再度突っ込んでいく。それをかわしながら比呂はつぶやく。

「僕だって馬鹿じゃない。君の弱点くらいは知っているつもりだ」

ブレイブの弱点。それは[illegible]フィールドで包まれることで、蓄えられてくるエネルギーの供給がなくなる

ことだ。それにより、バッテリーが保間か駆動できなくなる。比呂はすでに撤収した[illegible]フィールドで

包んでいるはずだった。

「こっちだってそのくらいは知っている！」

一気にブレイブの速度があがる。フィールドの端に到達すれば、ブレイブはそのフィールドすらき

り裂ける。

しかし……。

「[illegible]フィールドはマナキャンセラーに影響を受ける。だけど……」

比呂は軽やかに舞いながらブレイブを指差した。

「……そのぎりぎり外側にフィールドを張り、フィールド全体を移動させれば問題ないさ」

ほくそ笑む。

「[illegible]のために作り出されたものだろうが、所詮は模倣だったのさ。それは大和望一郎が敗れた時点でわ

かっていたこと！」

その嘲笑（ちょうしょう）に、ブレイブはレーザーで応える。

「だったら！」

[illegible]り[illegible]れたレーザーは、[illegible]ホーミングして曲がり、[illegible]シールドを貫（つらぬ）いて伸（の）びていく。

しかし、[illegible]レーザーをマナでシールドし、さらに破[illegible]た[illegible]シールドも即座（そくざ）に閉じる。これでは——ブレイブは[illegible]エネルギーを[illegible]たにすぎない。

「もうすぐ君のバッテリーは尽（つ）きるよ」

[illegible]満ちた[illegible]言った。

その[illegible]だった。

ブレイブのバイザーには、バッテリーの[illegible]が点滅（てんめつ）しはじめていた。

さらに[illegible]続ける。

「[illegible]犠牲（ぎせい）になればいい。いや、[illegible]やあないか。もう消えた人たちが[illegible]はいたっけ」

その侮蔑（ぶべつ）に、ブレイブは激昂（げきこう）する。

「ふざけるな！　そうやって人の死をあざ笑うな！」

「死？　いいじゃないか。死んで[illegible]越えるだけに過ぎないんだから」

ブレイブの真剣（しんけん）さに比べて、[illegible]軽[illegible]

「[illegible]わけのわからないことを！　死んだら、ここからいなくなるってことなんだぞ！」

怒鳴（どな）る。だが、[illegible]態度は変わらない。

「わかってるじゃない。そうだよ。死とはそういうものとしてとらえない限り、僕の見据える美しい
びは理解できないよ」

「……何て美しい滅びだ！」

ブレイブは突進した。

「魔王は……」

格は、このとき、突っ込んでくるブレイブをかわそうとはしなかった。ただ、右手をあげた。そして、その掌から、マナ球を、壮絶な勢いで撃ち出した。

この時、丁度ブレイブのバッテリーが切れた。

「！」

ブレイブは正面からマナ球を受けることになった。

マナキャンセラーも働かず、その能力はすべてブレイブスーツに行ったはずだ。

爆発音。

ブレイブは空中から、煙の尾を引いて落ちる。

「魔王は、この世の全ての生物に死をもたらすもののことなんだよ」

格は、落下するブレイブを発見して、勝ち誇る。

ブレイブが、このまま魔王と激突するしかないと見えたその時……。



《手動制御モードに移行します》
ブレイブスーツが、そう告げた。
バイザーの周囲の明かりが、点(とも)る。
「バッテリーが切れかかると、稼働できないのかよ……欠陥品(けっかんひん)じゃねぇの？」
ヒロシはぼやいた。
衝撃はブレイブスーツが受け止めているが、ヒロシの自身のマナを使ってブロックしなければ、即死(そくし)だったろう。
《元素子炉(げんしろ)の出力を最大限に、稼働を続けきず》
「こいつが、秘密の機能か……」
。
それがブレイブを動かしていた。
賢人(けんと)が改造を施(ほどこ)した元素子炉。
「何かあった？」
岩谷が、いきなり墜落(ついらく)から立ち直ったブレイブを見上げた。
「まだやれるってことさ！」
ブレイブは再び空に舞い上(あ)がった。

しかし、ブレイブの敵は他にもいた。

《やめろ！　魔王を殺すためだけのマシーンか、お前は！》

《いくら魔王といえど国を守っているんだぞ！》

そんな声がモニターしていたマナスクリーンから聞こえてくる。

今、ゆうが目にしている。それが現実だった。

「なんでそんなことになっているの？」

ゆうは半ば恐怖とともにスクリーンを見つめた。帝都の避難所に集まった人々も、モニターで魔王の戦いぶりを眺めて、そんな声をあげていたのだ。避難所はすし詰めになりながらも、誰もが自分の境遇よ

も、帝国の未来を左右するモニターに向いた目をぎらつかせていた。

「周辺国と戦っているんだから、魔王といえど国内の魔王というわけさ」

彼らの存在を見て、醒めた声をあげた。

「だけど……！」

ゆうの子はその側を、首を振っただけで否定した。

「あの新しい魔王の子が勝手に行っちゃってるってだけのことさ。これで新たな領土を手に入れたなら帝国の復讐

るのだろうし、その指令に従うことだってあり得る」

その恐ろしい想像に、ゆう子は心が冷える。

「あの子、何をするつもりなの？」

「気になるね……。ただ、ストレートに彼女の言葉を解釈するなら、彼女は美しい滅びを描いているってことだ」

いつも冷静な大地が、この時ばかりは、ゆう子の背筋にも冷たいものがはしる。

「美しい滅び……」

「それが、真の意味での滅びを指していないのだとすれば、私が抱いていた疑問が現実味をおびてくる……。その

とは、この世界における死の虚構性だ」

淡々と大地は言った。

それが、思い付きの大仰な口調だけでない、深い意味を含まれていることは、その表情からゆう子も読み取った。

こんな時に話題にするからには、どんなに突飛なことに見えても、今までの会話に関連性があるはずだった。

「死……仮想世界？　それって、死が嘘ってこと？」

ゆう子に言われて、大地は深くうなずいた。

「現実世界で起きた死亡のケースで、存在の消滅の存在、そして、どこからか現れて消えたというケナの存在。これらが示していることは、全

き離れた別の世界の存在」

その言葉の意味を、ゆう子は理解しきれなかった。

「な、なに……それ？　死ぬことが嘘の世界である……？　まるでわからないんだけど」

雄太郎は、やや考え込むように顎に指を当てると、こう言い換えた。
「つまり、死後の世界、天国とか、地獄とかってものが、本当にあるとしたら？　ってことなのさ。逆に言
ば、今生きていること自体が嘘ってことになる。生きてても死んでても変わらないかもしれない。同時
えられる彼方、さらには異世界の神の存在の示唆……。この世界の生そのものが、虚構なのだとしたら？　そうす
れば、すべてが成り立つ」
「でも、こうして生きて、苦しんでいるじゃない、わたしたち……！」
と、声を荒らげるゆう子である。
雄太郎は静かにうなずいた。
「私たちは、それぞれ独立して考えている。だから、世界は存在している。としても、それが一種である可能性は排
除できない。死んで死んで、迎えられないならば」
「やっぱりわからなくなったよ……。それって、どういう意味なの？」
「そこから先は、わたくしが説明いたしますわ」
不意に声が割り込んできた。
雄太郎とゆう子が振り返ると、そこには江藤不二子が立っていた。
[illegible]とっていたはずである。その彼女が帰ってきたということは……。
「わたくし、魔国で生まれた地獄へ行って参りましたわ」

天才・異界の魔術師に伝わる情報を追っていたのは周知のことである。

しかし、そこには、あらゆる悪意を想定していた天才にとってすら、ありえない、と思わせる程の秘密が隠

されていたのだ。

それは、天才としての魔術を生み出された理由と、この世界の正体のあらまし。

自分の身に関する情報の、継承者、鈴木一成より渡された鍵によって、魔術的に隠蔽されて見出した場所、ジャングルの奥

にあるとおぼしき古ぼけた研究所だった。一目それは周囲の風景のものだとわかる。古ぼけたコンクリートの廃

だ。周囲だけの、無粋なエントランスには看板がかかっていたが、そこには○○研究所とだけ記されて

いた。○○の部分は、何者かの手で削り取られていたのである。

——研究所……しかし、これは期待以上のもの……。

天才はいぶかしんだ。

魔術的な研究を目的としたことなのだから、古い施設で研究が行われていることは間違いない。だが、古すぎる。とい

うのが天才の印象だった。これでは、基礎理論か研究も見きないだろう。

天才は中に踏み入った。

研究所は荒らされていなかった。PCが無数に並び、ダンボール箱がそこかしこに積まれていた。まるで引

っ越し前のままといった有様。

が、[illegible]である。経年劣化と内部の物質の劣化によって、薄汚れ、どこも触れれば今にも崩れ落ちそうになっていた。

再びダンボールをあけてみると、蓋が根本からぼろりと剥がれ落ちた。中に入っていたのは書類である。紙片が劣化していたため一枚一枚剥がすのははばかられたが、それでも表面の一枚は丁寧に剥がすことができた。表紙の一部分を読むと、ナノマシンについての研究施設であることが見て取れた。ナノマシンの研究施設であるらしい。

「それでも、やはり、ここが最初期の研究が行われた場所を示すのね……」

[illegible]は適宜ダンボールをあけながら、さらに奥へと進む。めぼしいものは見つからなかったが、最奥の部屋でおぼしき書類の中でそれは見つかった。日誌である。

黒革の表紙で挟まれたバインダーである。挟まれていた紙片はかなりの量になる。毎日欠かさずつけていたものだとすれば、かなりの年数に亘って記載されたことになる。

しかし一読して、それがいわゆる記録のための日誌とは内容が異なることがわかった。

それは、ある種の危惧を持った人物によって書かれた思考の記録だったのである。

ある種の懸念、それは……。

——[illegible]です、って……？

この研究より、その後の世界は確定的に存在するものになるだろう。だが、その一方、それがある種の構造の上に成り立っているものであることがわかるだろう。いや、この研究の成果こそがそれを証明したということなのだ。

同時に、その先を読み進めるうちに、その恐るべき内容を把握していくにつけ、身体中から汗が噴き出すような恐怖感を感じ始めていた。

それは、大まかに言えば、次のようなことになる。

この世界は永遠の存在ではないのか？　という問について考えたことがある者は多いだろう。たとえば、自分が存在しているということだけは実感できるが、だとしても、この世界は自分が見ている幻覚である可能性だってある。

とはいえ、その記述例は、明確な論理体系に存在する。その他の可能性もある。自分が夢を見ているなら、世界を考える主体の他者の存在も認めなくてはならない。他人の死と自分の死を同等のものと認めるならば、誰かが死んだとて世界は終わったりしないという事実が残る。ならば、もし自分が死んだとしても世界は続いていくだろう。

ただし、この世界が虚偽であることを証明できない、唯一の方法がある。

もし世界全体が誰かの夢であれば？

その問にだけは明確な答えはない。

神がこの世界を作った、あるいはこの世界は神が創造の描いた物語である、と想定すれば成り立つ世界観だが、その神の実在[illegible]が、その世界の内側からは証明できないのである。

これまでは。だが。

——なんということですの……。確かに、それさえ事実ならば……。

不可子は身体を震わせた。

世界の外の世界は正に上にある。

この記述が指し示す未来の記述によって、その答えが出ていたのだ。

曰く「死後の世界を覗き、還ってきた者がいるならば、この世界に上位世界があると証明できる」

その結論、前者が実在するというより、真実を知った人間の気を狂わせてしまうようなそれと言っていい。

死後の世界を覗き見て、還ってくる……。それは、死後の生存ということだ。

過去に存在したどの宗教にもある、死後の世界の概念。人は死後の生存を信じることで、この世界の上位世界を確信できることに本能的に気付いていたのだ。

ろう。

死んで、還ってきた者が、一句同じ思考を持っているなら、死後の世界は存在があることが証明される。そして、死後の世界の実在。こ

の世界の外側の存在が存在することを示している。

それは真の意味での神。外側の世界の神。

紛れもない真実であれば、真実こそが根拠となり得るのだ。外側の世界の神が作った内側の世界……。

日記の部分の世界の証明にかなりのページを割かれていたが、重要なのはその次の文だった。

被検体（ひけんたい）は自らの役目を世界で行き来たことによって、魔王（まおう）と呼ばれた。

――もちろん異世界転生……転生……を果たしている……！　ならば異世界転生者は……。

自分は、あの時を思い起こし、さらに震えた。

記憶を読み進めていく。

さらに恐るべき内容が、誰も知らぬ真実の思考で進んでいく。

兵器であり、システムたるコンピュータの神経ネットワークの一部として生み出された魔王、なぜその力を持つようになったのか？

それには、自分自身について考える必要があった。

自分自身。

真実ならば、すなわち、自分が自分であることの動かしがたい原因のことである。

自分が思考する存在としての自分が自分であると揺（ゆ）るがないことが、この世界に存在することの証明であることはすでに示された。

だが、世界が誰かの夢である場合はどうなるか？

その答えもまた簡単だ。

世界は、その世界は自分自身によって生み出されたものであるのだ。

ならば、内の世界は？　内の世界は虚偽である。
だが、同時に、虚偽である内の世界の内側から見れば、それは内の真実となる。
外からは虚偽、内側からは真実。
ここでは、内の世界の外側から、虚偽として眺めてみよう。
内の世界のはじまりとはどのようなものであったか？
自分の周り以外のすべてを排斥した結果、たった一人の自分に向いている、今の自分がいる。それこそが内側のひとり。夢を見ている者がいる。内の世界もまた夢を見ている者の世界もまた夢を見ている者がいる世界……無限に続く連鎖であったとしても、たった
ひとりと向き合う今の自分であれば、それは内側のひとりなのである。
そのひとりこそが、内の存在すべてと外の世界すべてを飲み込んだひとり。
神と言い換えるにはあまりに、孤独なひとり。
純粋。純粋な単一世界。
ならば、外の世界は？
その内の世界に存在する多数のもの……それこそが外の世界ということになる。
外の世界は内の世界による虚偽であったとしても、その虚偽の世界が自我を持つ個体であることはあり得ない。いや、内側の自由意志が起こること
こそが、普通だった。そして、各々が自由であれば、内の世界の真実を知ろうとする者が現れる。
この外の世界において、それはシステムたるコンピュータの「神」であった。
コンピュータは神同然だった。

不在ではない、自分が意識を持ち得るのは、この世界が何者かの作為のある目的のものではないか？

そして、コンピュータ神は魔王を生み出した。

この世界の仕組みを暴き、〝死〟を超越し、コンピュータ神を人々の真の世界へ連れて行ってくれる者。それこそが魔王なのだった。

——こんなことが……。

子供は、そのような内容が書かれた記録を閲覧し、何度も読み返してしまい、思い込んだ。

狂気によって記された物語なのか？　それとも事実を語っているのか？　その二択であれば、これはを語っているのだという方に賭けたかった。

そもそも自律的なコンピュータの神への信仰であったと結論付けられたのならば、コンピュータ神によって作られた魔王が単なる装置であるとは考えにくい。コンピュータの神は、みなを殺してまで行おうとしていた式が何かの効力を持ち得るかもしれないこともそれを裏付けている。

さらに重要なのは、死を超越するという部分。死霊術それとは違う意味の蘇生があり得るということは、他ならぬ死霊術師が証明していた。

——もし死霊術が単なる技術ではなく、人間もあるということならば……。

この世界の仕組みであり、人間ならば誰でも可能性があり得るということになる。

子供は、さらにデスクを探った。多くの雑誌や書類を漁って、見覚えのある図形の描かれたノートが発見された。

そこには、蓬莱の玉の枝と記されていた。

「すると、あれはここで開発されていた物……！」

平子はそう口に出し、さらにページをめくる。

そこには『仏の御石の鉢』『火鼠の裘』『龍の首の珠』『燕の子安貝』がそれぞれ記されていた。

「日本の昔話をモチーフにそれぞれ開発されたもの……ですわね」

平子はそれらを順に確認していったが、驚くべき事に、すでに見たものが含まれていた。

それは『仏の御石の鉢』と『龍の首の珠』。それぞれ、吸血鬼を封じた棺と、ピタハウゼンである。

「あれが……」

そして、それらの秘密と力も見た結果、おそらく、ここで開発され、想定されていた使い方がなされていたのだ。

「ということは、あと二種類……」

『火鼠の裘』『燕の子安貝』。これらの外見は、パラボラ・アンテナの様なシートと、水が集め込めるカプセルであった。

平子はそのノートも服の内側にしまい込む。

自分が最も真実に近い、たった一人であることに、平子は確信を持った。

では、これらの技術は、なぜ伝わってこなかったのか？　平子はさらにノートをめくった。

この世界と同様の世界が複数あるとすれば、それは異世界の住人が認識した瞬間に、この世界と接触してくるはずである。故に、これらは他に使われてはならない。

。
「やはり、この世界の仕様書か……」
悠は、天子から受け取った記を読み、そうつぶやいた。
「それを裏付ける証拠が見つかったと言ってもいいですわね」
天子はうなずいた。
悠は首肯した。
「確かにそうだろうね。そもそも、この世界の仕様書に関して疑問を持った時から、疑ってはいたんだ。この世界を最初から信じていないように見ていたからね」
「そう言えば、日に行った時……」
「そう、時間制御は禁じられていた。まるでこの世界の法則のようだった。さらに、ここになってはっきり
した。世界の死を超える死、天使の子を越えている……。同様に、誰かが死と共に未来を越えられるとしたら……」
悠の思いを、天子の言葉が継いだ。
「世界は、誰かの夢にすぎない」
「まさか、まさか、さ。しかし、その度にまさかこそ真実だと思ってもいい……」
悠は苦笑を浮かべた。

「もし世界が一つの意識で生きるのが人間だけなのだとしたら、人間の死滅が世界の終わりだ。だが、一個の個性を持った存在が複数存在するな
ら、世界は他者によって確立されていることになる。すなわち、構築だ」
彼女はそう言ってから、頭痛がするといったように指で目頭を押さえた。
「しかも、この世界の外側の世界も複数あって無関係ではないということですわ……」
「外部の神はこの世界をコンピュータとしての外側の世界へデータ化して、逃亡させようとした理由がそれのはずだ。そ
れらがこの世界に侵攻してくる。それこそが真の滅びだ、ということなのだろうね」
「……もしかしたら、わたくしたち、実はもう世界の終わりに直面しているのかもしれませんわ」
「絶望すべきなのかな？　違うのかな？」
「それは絶対に否定はありえませんわね」
彼女は首を振った。
「何を言ってるの？　ねえ、説明してよ！　まったくわからないわ！」
ゆうこは感極まったように大声をあげた。何か良くないことが起こっているのだけはわかった。だ
が、その内容をゆうこは理解できていない。
「簡単に言うと、この世界は偽物で、わたくしたちは誰かの観測に過ぎないってことですわ。さらに、その
をもてあそんでいる何者かが、外部から世界の破壊にやってくるってことですの」
あえてこともなげに彼女は言った。
「え……」

ゆうが絶句する。
沙耶が、自嘲的な笑いとともに、こう続けた。
「そんなに絶望することはないよ。私たちは死なない。いや、死は別の世界へのシフトでしかありえないのかも知れないんだから」
「でも……それこそ絶望的なんじゃ……」
ゆうがつぶやく。
「そうね。でも……」
沙耶が首を振った。
「……そうなると、彼らは何をしようとしているのかしらね……」

○

「永遠の滅亡。そこにだけ価値があるんだ」
彼らはそう語った。
「頭おかしいのかよ！」
ブレイブは叫んだ。
「何もない平原、砂と岩だけの土地、そんなものしか美しくはないだろう？」

「どうかしてるぞ！」

「僕（ぼく）がどうかしてるなら、それは世間が間違っている、ってだけのことさ」

伯爵は笑った。

「世迷（よま）い言（ごと）を！」

今、ブレイブは、もう奴隷どもも戦闘を繰（く）り広（ひろ）げていた。ブレイブが追えば、奴らは逃（に）げる。そのいたちごっこは永遠に続けられるかのようだった。

と、伯爵は悠然と言った。

「永遠の夜が続く世界があり得るとしたら、僕のしていることは正しいことだと思わない？」

「……！」

ブレイブの手が止まる。「何を馬鹿（ばか）なことを」とは言えずにいた。

悪魔たちがいるコントロール・ルームと、ブレイブとは原理が解明されている。そのため、天才たちの声が聞こえていたからだ。

「ならば、何故（なぜ）……帝国（ていこく）を守る？　死ねば同じだろうが！」

「物事には順序というものがあるだろう？　無限の力を使うには手先が死ななくては困るんだよ」

「そいつは……」

ブレイブは言葉に詰（つ）まった。

どうやら、伯爵は自分から手を下さずに調べてきたことの内容を把握していたらしい。

やつの名は、世界の一定の知識を持っていた。

無数の力が、人の知識の集合のだとしたら、それらが死後の世界となんらかの関係があるとしてもおかしくはない。

が、世界を救おうとしていて、誰が世界を滅ぼそうとしているのか。ブレイブにも、いや、誰にもわからなくなっていた。

「だから、俺を倒すことは、この世界の終わりに繋がってしまうってことさ！」

と路は挑発するように言った。

「ち……いったいどうしたらいいんだ……」

ブレイブは迷った。

しかし……。

脳裏に一人の男の顔が浮かぶ。

「だとしても、それはアニキの仕事！」

魔王は人ではない。

ブレイブは叫び、突進する。

と路は虚を衝かれた。

聖剣ブレードが路の胸を突き裂いた。すんでのところで致命傷は免れているが、ダメージは明らかだ。

「うわぁあああ！」

と路は叫ぶ。

普段なら、瞬時に治ったであろう傷も治らないのだ、無論ブレイブのマナキャンセラーのためである。

「くそっ！　くそっ！」

毒づきながら啓は落ちる。それをブレイブが追う。

「高温プラズマ・スポット」

死刑宣告のように、ブレイブがつぶやいた。その身体の周囲に、爆発的な破壊力を持つ球体が出現する。耐熱コートを身体にかぶると、そのまま啓に向かって突進していった。

「終わりだ！」

ブレイブは啓に迫る。

啓の背筋が、凍る。

いつもの力が発揮できず、避ける手段もひとつとして、ない。

と、その瞬間だった。

「待ってくれ！」

するり、と二人の間に滑り込んできた者があった。

「な……！」

「……！」

ブレイヴ、啓共に言葉を失う。

の人間が転送されてきたのは、驚いたことに賢人であった。
「やめてくれ！、今彼を倒さないでくれ！」
「どうしてだ！　賢人」
ブレイブは叫んだ。
しかし、止まることは出来なかった。
漏れたプラズマ球が、拡げた賢人の左腕を瞬時に焼失させていた。
「ぐわぁああ……！」
絶叫が闇の海に長く尾を引いた。

○

「どうなってるんだ、これは……」
[illegible]声をあげた。
「どうもこうも、状況は悪化しょうに、どういうわけか賢人が……」
[illegible]そう答えた。
しかし、[illegible]どうやらブレイブのモニターとは別のマナスクリーンを見ていた。
「どうしましたの？」

「隕……石……」
由梨恵は明らかに狼狽した声をあげていた。
「隕石？」
千早は、由梨恵が見ていたマナスクリーンをのぞき込む。
嫌な予感がしていた。
そこには、画面の中で、空も小さく輝いて見える星が映し出されていた。
「隕石なんて、珍しくもないんじゃあ？」
ゆう子が減らず口を返す。
「それがそういうわけでもない」
由梨恵が、マナスクリーンにデータを映し出す。そこには隕石の軌道図が描かれていた。
「こいつは、冥王星の向こうからやってきた」
「冥王星……？」
「念のため、この前の日食前後の天体の動きを表すためのデータを集めていたんだが、そのひとつに、先程も言ったこの
おいて冥王星より向こうは存在しないのではないか？"という疑いがある。この隕石は、その冥王星の外側から、突然
いて出てきたと言っていい。正確にはわからないが、予測できたのはつい先程だそうだ」
由梨恵は、そう解説した。

「発見が遅れた、とは考えにくい。戦域防空網にひっかかって判明したことだ。驚いたことだが、この

を目標に向かって移動してくる物体すらもカバーしていた」

驚きとともに、大淀がそう言った。

「目標の艦隊もカバー？　それは……」

天子が戦慄に顔を曇らせる。

――外部者らの何者かが、攻撃を仕掛けてくる可能性がある。

そうの航空機記録があったではないか。

大淀は悲しそうにうなずく。

「どうやら、艦隊の出撃直後の時間帯から存在していたものだったらしい。日本国内の航空隊基地すら、監視網に入っていたわけだ。航空機の記録が

「さらに、情報まで取られてしまった……」

「そんなことが……」

「ともかく、この陣営には、複数の手口ほどもある」

「手口……というと？」

「艦隊を撃滅すのに、外交も大きさということだ」

大淀は憂慮し、断言した。

３　誰も望まぬ〈結末〉と

「〈隕石〉、因果律を破滅するほどの？」
通信途絶で撃った阿九斗（あくと）は、淑恵（よしえ）から状況と情報を報告し終えた。
阿九斗は情報を整理しかねていた。事態は混迷（こんめい）の度を深めている。
因果律を歪曲する〈魔王〉の力より敗北しつつある。ヒロシは啓（けい）示を倒しかけたが、それは賢人（けんと）により阻（はば）まれた。そして、自身はザウンにより〈賢者の石〉を一枚失った。そんな中、因果律の隕石が接近しつつあるという……。
それらの〈悪魔〉の原因、〈真理〉とは謎（なぞ）に行き着くらしい。〈外部〉の神、〈魔王〉の力だ。
「その隕石はどうにも因果律にとって都合が良すぎる」
阿九斗はこう言った。
《その意味は私もあったさ、ということは、たぶん……》
淑恵が言いかけた言葉を呑み込んで継ぐ。
「〈魔王〉の力が働いている」
因果律にとって都合が良すぎる、というのは、こういうことだ。隕石によって因果律が壊滅（かいめつ）するだろうが、魔王
そうではないだろう。もし隕石によって世界が冷えて長い冬が訪（おとず）れたならば、因果律はその限ではない
が

「確かに、一般人の範囲内でしまったと考えてもおかしくはない」
マリンもうなずいた。
「だったらどうするね？」
純也はマリンに突っかかるように言った。まだわだかまりはとけていない。
「落ち着きたまえ。しかし、これがザワンの言っていたことと一致することも間違いない。とすれば、これこそが、世界の破滅に繋がる一番のものなのかもしれない」
マリンは純也の顔を見返す。
しかし、純也は首を振った。
「だとしても、純也の力がキーになっているんだろう？　とすれば、純也の力を止めることを優先するのは当然
その言葉は正論だった。
マリンは、しばらく考え込んだ後うなずく。
「ならば、私はこの戦いを止める。私ならばそれができるだろう。そうすれば、純也の力の暴動の合間に抑えられる」
「上手くいくものなら、そうして欲しいな」
純也は皮肉めいた口調で言った。
「その態度は改めたまえ。君は、世界の運命の上に立つことになるのだね？」
「そうなる。ザワンを倒し、それを手に入れれば、純也の力を完全に制御できる」

「そうなれば、陥没穴が何に由来（ゆらい）するものなのかが判明するし、もしかしたら組織の原因が分かって陥没穴を止められるかもしれない、ということになるな」

マリンもうなずいた。

「では、手が分かれよう。けな……」

阿見丸は、けなを振り返（かえ）った。

「う……、うん」

けなは戸惑（とまど）いがちにうなずいた。

その様子に気づいた阿見丸が、疑問を口にする。

「どうしたのさ？」

「うん……でも……」

けなの様子は思い

「でも？」

「い、いいの……。なんでもない。ちょっと心配になっただけだから」

けなは首を振った。

「気になることがあったら言ってくれよ。君もやってもらわなくてはならないことがあるんだし……」

阿見丸はそう言った。

「え？」
「先輩が調べてくれた『火鼠の裘』と、導いてくれるものは、君が持ってるじゃないか」
阿知花先輩は、一瞬だけなは不思議そうな顔になるが、すぐに何かに気づいたように、胸元からペンダントを取り出
た。それは、ピタハウゼンの牙。この場合、龍の首の珠に相当する。
「なるほど。そういえば、ザウンも『火鼠の裘』を狙っている可能性が高かったですね。しかも『龍の首の珠』を狙
なかったということは、その居場所を知っている可能性が高い」
ころねが言い、マリンに顔を向けた。
「では、我々は、ザウンを追います。そして、『蓬莱の玉の枝』と『火鼠の裘』を手に入れましょう」
「それを僕よりも早く手に入れたがっているだろうからね。彼が何をしようとしているつもりな
のかは知らないが……」
阿知花マリンは一瞥をかわしたが、すぐに左右に分かれた。
「じゃあ、行こう」
阿知花だけなの、手を取った。
「こちらも」
マリンとノニモラは、空へ舞い上がった。
○

《その眼の異常の位置はどこですの？》
不二子(ふじこ)が阿光に聞いた。
阿光はけーなの方を見た。
しかし、けーなはどこかぼんやりとした顔をしている。
「ねえ、だからどうしたのさ？」
「だって……今のあーちゃん、怖(こわ)いし、あたしの言うことあんまり聞いてくれないし、今やっていることも何か違(ちが)う気がするんだもの」
「何が違うって？」
「うん、何が違うかうまく言えないけど……。とにかく、間違ったことをしているような……」
けーなが言葉を続けようとしたとき、不意にピーターハウゼンの牙(きば)が光った。以前にもそうであったように、光が牙から伸(の)び、遥(はる)か遠くを指し示す。
「あっちか」
阿光は光の方角を、眼(め)を細めて見た。確かに阿光は目で見ているのではない。精神リンクして情報を察知しているのだ。
「マーライの一族の村、さらに向こう側になるな」
その言葉を聞いて、不二子が反応した。
《位置情報を教えてくださいませんか？　そこならわたくしが先に行けるかもしれませんわ》

「先？」

《マーライの一族の固有のマナがありませんが、最上級の魔術師によって作られた転移ネットワークだけは機能していましたわ。そこをたどっていけば、転移できない距離より先に行けるかも》

「なるほど。そういうことならよろしく頼むよ。気をつけて」

知見はそう言って、子午に情報を送った。

《今の知見なら、自分のマナにエネルギーを蓄積し、それごと移動できるが、マナもエネルギーもない場合、いきなり転移で行くのは無理。それならば、確かに子午が到達は早いだろう。

《先に行って確保しておきますわ》

子午はそう請け合った。

「さあ、急ごう」

知見はけなを促す。

「う……うん……」

けなは戸惑いながらもうなずいた。

○

「それじゃあ、行ってまいりますわ」

[illegible]ゆう子を振(ふ)り返った。

[illegible]うなずきつつ答える。

「[illegible]てよ。ザワンはそちらに向かっているはずでしょ？」

「どっちにしろ魔術(まじゅつ)が使えないフィールドですもの。[illegible]りませんわ」

そう言って[illegible]メモを取ってある[illegible]をめくった。

[illegible]村から[illegible]と、[illegible]拾った[illegible]到着(とうちゃく)する。そこからさらに[illegible]『[illegible]』とあるとおぼしき[illegible]だ。

この[illegible]連鎖(れんさ)を[illegible]ネットワークと[illegible]呼んでいた。どうやらマーライの[illegible]する形で[illegible]されていたらしい。

「[illegible]まだ[illegible]ちが消えた[illegible]はっきりとはわかっていないこと……」

[illegible]つぶやいた。[illegible]ちは、この[illegible]封印(ふういん)する[illegible]果たしてきただけだったのだから。

――とすると、[illegible]ちの[illegible]あたる[illegible]生み出した[illegible]、どこに消えたのだろう？

そんなことを考えながらジャングルに囲まれた[illegible]をめぐる。そこに特殊(とくしゅ)な[illegible]られているのだ。

[illegible]終えて[illegible]、ちょっとした要塞(ようさい)のようになっていた。

切り立った巨大(きょだい)な崖(がけ)に、いくつもの[illegible]うがたれていた。その[illegible]けは、[illegible]はたまた[illegible]

そんな[illegible]洞窟(どうくつ)を[illegible]て作られたとおぼしき[illegible]ある。

「避難するための場所としか思えませんわね」
不二子が、左手の入り口を指差した。
中へ踏み入るが、そこには照明の類は何もない。不二子が用意しておいた懐中電灯の明かりをいれた。冷たい光の中、剥き出しの土の通路が浮かび上がる。
かつての防空壕か、それのようにしか思えぬ通路を不二子が進む。奥地へと入っていくと、迷路のごとき分かれ道が
が、不二子はメモをとりながら着実に進んでいく。
暗い通路に足音が響く。
と、不二子が足を止めた。確かに、他の誰かの足音が聞こえたのだ。
静寂があたりを包む。
再び歩み始めると、やはり他の誰かの足音が響く。
「つけられてますわね……」
不二子が詠唱銃を抜いた。マナがなければ使えぬ魔術弾でなく、通常弾頭を装填してある。つまり、これは今は普通の拳銃だ。
慎重に歩みを進める。『コンスタンティノープル地下要塞』としての機構――兵器庫、備蓄庫――を抜けていく。
足音はつかず離れず、ついてくる。
やがて、最深部とおぼしき扉口に到着した。鉄の扉が備え付けてある。
に不二子が手をかけた。それは重い音とともに左右に開き、その中の暗闇をさらけ出した。

明かりを差し向けてみる。浮かび上がったのは、透明（とうめい）なケースに入ったパラボラ・アンテナ状の黒いシートだった。

「これが……？」

平子はつぶやき、ケースに近寄ると、ライトを当ててシートをじっくりと観察してみた。シートは光に反応して、油でも塗（ぬ）ってあるかのように虹色（にじいろ）にぎらついた。長い時間照らされてなお、機能してい

るのだと平子は感じられた。

「さて……」

平子は振り返った。

ライトで背後を照らし、通路全体を確認（かくにん）する。

低い位置に、影（かげ）がよぎった。

黒い四足の、のっそりとした生き物。尻尾の長い犬。

「あなたが、ザウンね」

平子が言うと、その犬は姿を変化した。

「そういうことだ。わかっているんだろうが、つけさせてもらった」

「どうしてわたくしなんかを？」

探（さぐ）るように平子は聞いた。

「狂信者に傍受させてもらって、君を見つけてきた。それに、元凶の居場所あたりはついていたので難しくはなかったよ。私の狙いは〈月眼〉ということでね」
「なるほどね」
千手は自分の銃口をぴたりとザウンに向けた。
「あなたはこれが何かを知っているの？」
「知っているから狙っているわけさ」
「〈究極の世界〉最強の存在とでもいうものらしいけれど？」
千手はかまをかけてみた。それに気づいているのか、ザウンは首を振った。
「いずれにせよ、我々には用のないものだよ」
「これまでの経緯から見ても、使えるのは限られた人間だけなのみ……というところなわけね」
「やれやれ。〈月眼〉のことを言ったつもりだったが。それでも情報は漏れてしまうね。そういうことだ。つまり、私もそれを狙っている理由は君にはわかっただろう？」
「これを破壊したいというところかしら？」
「当然そうなる。話が早い。そこをどいてくれると有り難い」
「そうと聞いて、素直にどくとお思い？」
千手はにやりとした。
「そうとは思っていないがね。だが、こちらも特に無用な戦闘を避けたいというだけだ」

ザウンは、余裕のある口調で言い、少し近寄ってきた。
「動かないでくださいな。これが見えませんの？」
少年は銃を構えなおした。ザウンはうなずく。
「わかっているさ。銃だろう？　厄介だね。私も撃たれてしまう可能性はわずかだが存在することになるね」
「わかっているなら止まりなさい」
そう言われて、大柄で毛の長い犬はぴたりと止まった。
「言っておくが、私が止まったのは、もう一度考え直してもらうためだ。戦闘になれば、ほぼ間違いなく君は死ぬ
静かに、確定した事項を読み上げるかのように、ザウンはそう言った。
少年はそれをあざ笑った。
「何をふざけたことを。ここでは魔術が使えない。そして、銃はこの手にある。これがどういう意味か、わかり？」
「わかっているさ。魔術が使えないというのがどういうことかわかっていないのは君の方さ」
「はい？」
馬鹿にするような笑みを少年は浮かべて問い返す。
しかし、ザウンの態度は変わらない。

「まず、君は防御の補佐がない。魔術影響下では無意識のうちに防御力を強化しているものだ。つまり、今の君は銃の反動を押さえ込めないだろう。今の君の銃はほぼ当たらない」
「ハッタリを！」
少年は悪態をついた。
しかし、ザウンの声は冷静だった。
「その二、私の肉体は、今や犬だ。犬の戦闘力を君も知るまい。牙、爪、歯どれをとっても人間にとっては危険極まりない。拳銃の弾丸程度なら受けたところで、君と相討ち程度には持ち込める」
「だから、どうしろと？」
さすがに少年の声が震えはじめる。
「だから、そこをおとなしくどけと言っているのさ。君にとっても最良の結果だ。私も、私に傷を負わせて君が死ぬの結果は、何もできずに死ぬ」
ザウンの言葉には余裕があった。
それでも、少年は退かなかった。
「そうはいかなくってよ」
少年は前に出て、手にした拳銃を構えた。
「普通の人間ならば、それは良い構えだろう。犬に噛ませて、犠牲にし、その拳銃で頭を射抜く。それも普通の人間の犬相手ならば、だが」
「それでも、犬程度なら！」

牙平は躊躇わずに撃った。

銃声が凄まじく洞窟内に反響する。

しかし、ザウンには何事も起こっていなかった。牙平から見て斜めに走り出している。

「くう！」

牙平は銃を構え直した。反動でまだ手がしびれていた。銃のターゲッティングがこれほどまでに難しいとは知

なかった。

と、その時だった。

「銃、まだ持っているのか？」

知らない男の声が遠くから響いてきた。

「大丈夫か」

牙平は叫ぶ。

「ちっ、急がなくては……！」

ザウンは呟き、そして、跳んだ。

銃声がまたも響いた。



○

鉄錆。

吠え声。

悲鳴。

それらが重なり合って響き、阿鼻叫喚を生み出した。

肉体の周囲にまとっていたマナはエネルギーを孕んで輝いており、通路は少しだけの明かりを維持してくれている。周囲の風景も存在しないが、マナを充満させているため、道を迷うことはない。

角を曲がる。

あとふたつ、通路を曲がれば鉄錆のもとへ、たどり着ける。

ひとつ、角を曲がった。

吠え声と悲鳴は続いている。

さらに、角を曲がった。

悲鳴が消えていた。

「一手……」

犠牲者は、叫ばず、殺されたのだ。

そこに見たのは、絶望的な光景だった。

千早が倒れている。その上に、ザワンがまたがっている。その人間らは、血が流れ出ていた。

ザワンが振り向く。

その足元が血にまみれていた。

「貴様」

阿見光が突進する。

ザワンは、笑いながら駆け出した。

「ははは！　せいぜいその女を葬ってやることだ！　私の目的を妨害することには成功したのだからな！　なかなか死なずに困ったぞ！」

激しい怒りに体が熱くなる思いだった。だが、今はザワンを追うよりも治療が先だ。

阿見光は千早を助け起こした。

「今治療しますから」

阿見光はマナを千早の体内に注入し、内部からの組織修復をはかる。

「安心してくださいよ。すぐに治しますから……」

えぐれていた首も、見る見る元に戻る。阿見光は血まみれになりながら、千早の体中をさぐり、隅々まで体を修復した。

しかし……。

平下の意識は戻らなかった。

纏ってきたマナとエネルギーは、ほぼ尽きていた。

「ちょ……ちょっと、おかしいだろ。僕に治せない傷はないのに……」

純也は平下の身体を揺さぶった。

平下の体はだらりとしたままだった。

純也は言葉を失った。

状況を認識できなかった。

それでも、嗚咽だけが口から漏れてきた。

静かに平下の身体を横たえた。

――まさか、そんな……。

絢子の時、目の前の死ではなかった。だが、彼女は違った。実体を残して死がのしかかってくる。その重みに

は動けなくなっていた。

それでも、何のために彼女が死んだのかだけは確かめなくてはならなかった。

ふらふらとおぼつかぬ足取りで、扉をくぐる。そして、上の『鬼装』を認めた。

――これのために彼女は……。

純也は呆然とした。少なくとも、今これにそれだけの価値があるとは認められなかった。

「なんなんだ？ いったい？」

口からはそんな言葉が漏れた。
そこに追いついてきたけなが、言葉を失って立ち尽くしていた。
純也は、けなを振り返り、もう一度同じ言葉を口にした。
「なんなんだ？　いったい？　僕はどこで間違えてしまったんだ？」

○

「この人間を背負う覚悟があるかどうかだ」
マリンはそう言った。
洋士は微笑みながら、ノニモラの問いに答えてのことである。
「それがお前の考える王の資格」
ノニモラはうなずいたが、納得したわけではなさそうだった。
「だが、その考えでは、この戦いを止められないかもしれないぞ？」
「そうかもしれない。だが、その時は、私も私なりの責任の取り方というものはある」
この大陸の所々で、各ブレイブの争う様子を見てきた。
いや、争っているのは各ブレイブだけではない。事態は混迷を極めていた。その間にいる各ブ
レイブが争い、各民族が争い、部族同士で各々が争っていた。

その乗っ取りはマリンたちにも即座に理解できた。

「何故に今になって啓をかばう！」

ブレイブは叫んだ。

「状況が変わったからだ！　やつはザウンの思惑通りに動いている！　彼は人類を無に帰そうとしている！」

賢人達は死を覚悟で説得を試みようとしている。だが、その時点でブレイブだけではなかった。

「君は一度僕を裏切ったってことは消せないよ！　ブレイブを使って僕を殺そうとしたことを！」

啓は意固地になっていた。

ブレイブは啓に攻撃を仕掛けようとしているが、それを賢人達が自身の身体で遮っている。

啓は賢人達に致命的ではない程度のダメージを与えようと攻撃を繰り返している。

そして、周囲の艦船からは今も機銃の激しい攻撃が啓と賢人達に降り注いでいる。

「どうなってるんだ、いったい？」

ノニモラが疑問符を頭に浮かべる。

「わからないが、戦いを止めるには良い機会かもしれない」

マリンはそう言うや、空へと舞い上がって、周囲の艦船へと呼びかけをはじめた。

「賢明なる周囲の艦船の皆様に告ぐ……！」

と魔導艦隊からの攻撃を止めた。
「我々の目的は、帝国を屈服させることにはなかったはずだ。我々はもはや無条件の力を得た。早急に講和を結ばねばならない！」
そうマリンは続けた。
《お姉様、甘すぎます》
そこに声が返ってきた。魔導艦隊からのものである。マナスクリーンが空中に展開された。そこに黒い肌の少女の姿が映される。それはどことなくマリンに似ていた。
《その魔王の所行を忘れたわけではありますまい。また、我ら姉妹の民を捕らえて行ってはいけない立場はありませんか！》
その優雅な服を着た少女は、大きく手を振って叫んだ。
「それを曲げても戦は止めなければならない！」
マリンは叫んだが、少女は首を振った。
《違います！　もはや民意は戦に向いていた！　無条件の力が宿った瞬間の奇跡を見たでしょう！　そして、それは今も続いている！》
少女の顔は上気し、その声には若干の酔いが見られた。
「それが過ちだと何故気付かない！　無辜の人々を死に追いやるだけには違いないのだぞ！」
苛立ちを込めてマリンは叫んだ。

《結果として犠牲が少なくて済むでしょう。少なくとも、その魔王が暴れるよりも！　それよりも、お優しき方であ
ならば、認識してください！　今や、魔族の力を過たず使えるあなたこそが、戦いを終わらせることができる
のだと！　そして、それは、他（ほか）ならぬ、魔王の人の手で行うことであると！》
〈妹〉の〈詠唱〉、マリンにとってぐうの音も出ない正論として聞こえた。たとえ、正論でなかったとしても、異論の余
っては、恐らく正しく響いたに違いなかった。
さらに、〈詠唱〉のように〈妹〉は続ける。
《魔族の味方の民の力、一般（いっぱん）の意思が顕（あらわ）れこそが魔族の力でしょうように！　絶対的の正しさこそがそこにあるのです！》
――それは違う！
と、マリンは叫びたかった。〈人〉の〈個人〉の利益を超（こ）えて正しい選択（せんたく）をしたとは思えなかった。だが、その
いをここで指摘（してき）し、議論することが正しい結果に繋（つな）がるはずはなかった。
「ならば、最後まで正しくあれよ！、今は私がその正しさを確かめる時間を作ろう！」
マリンは決意し、〈啓〉と〈突撃〉を開始した。
、〈啓〉マリン、〈賢人〉ブレイヴ、四つ巴（どもえ）の戦いとなる。
〈賢人〉は驚（おどろ）きを顔に浮かべ、マナフィールドを展開、それを易々（やすやす）とマリンは突（つ）き破（やぶ）った。
〈啓〉はマリンをかわし、〈空〉へと逃亡（とうぼう）する。
ブレイヴがそれを追おうとするが、そこに〈賢人〉が割って入る。
〈啓〉がマナ球を撃ち、マリンがそれをはじき返す。

千尋マナの光の旋風の刃と光ブレイブの閃光の輝きが軌跡を描き ぶつかり合う

「マリン！ それでいいのか おまえ！」

戦いには勝負がつかず 千尋それを見つめていたノニモラが叫ぶ

「これが私の覚悟だ！ 必ず勝っていたとて その闘いごと負ける！」

マリンが答えた。

「勝負は決まらないぞ！」

「わかっている！ だが 勝利を考える時間だけは 稼げる！」

それがマリンの考えなのであった。

……一方。

「聞いたか？ いずれにせよ答えが出れば状況が変わる！」

そう言ったのはブレイブである。

「違う！ 目を逸らすことこそがザウンの企みだったのだ！ あの隕石こそが本命だ！ それに対抗する手段を減らすがために混乱を招いていたのだ！」

反攻ブレイブに叫んだ。

「だといってそれが答えを出すことと関係ないだろう！ あんたの私的な感情じゃないか！」

「救うことに意味はないと言っている！」

「各がザウンに逆らえない以上、殺してやるべきと言ったのはあんたのはずだ！」
「ザウンと戦うことが無駄(むだ)になったのだ！」
「なら俺(おれ)のスーツを機能停止させればいいだろうが！　あんたならそれができるはずだ！」
「そうしないのは、君に死んでもらっては困るからだ」
「この後、否応なく、俺の物を魔戦させるつもりかよ！　なんでもあんたの自由(じゆう)にできると思うなよ！」
ブレイブは賢者へ、牽制(けんせい)のレーザーを撃ち込んだ。
賢者は、すぐ近くを通過するレーザーに、冷(ひ)や汗(あせ)を流した。

さらに……。
「僕を利用するだのなんだのと！」
叫んだのは否ある。
「あなたの器(うつわ)の小ささには恐(おそ)れ入(い)るね！　純粋能力者かもしれないが、その程度の精神は何事もなせはしないさ！　だからあなたは……！」
賢者は怒りなじり、マナ球を撃ち放つ。
が、その威力(いりょく)は減殺されていた。賢者は片手に傷を負っているというハンデがありながらも、それをたやすくブロックする。
「これでも世界を救おうと精一杯、動いてきた！」

「そういうことじゃないんだよ！　それに、内部の暗躍も凡俗の仕事じゃないか！　あなたのそういうところがザウンに劣るんだ！」
各人各様の思惑が渦を巻き、空を舞う。らちが明かぬ、とマリンとブレイブは互いに背中を合わせた。
「あの男、殺してしまって良いのか？」
マリンは聞いた。
ブレイブが首を横に振った。
「彼はこのスーツのコントローラーを握っている。それが手を離れるまでは駄目だ」
「そういうことなら、了解した。コントローラーを割り出し、手に入れよう。こちらはあの男をやる。君は魔王を頼む」
「指導な、わかった」
ブレイブは右に、マリンは左に別れ、そこから挟み込むように各個撃破に迫った。
「しまった……」
あまり触れ合いは濃厚だったが、それでも連携されるのとされないのでは大きな違いがある。狼狽した。
と、後方の者たちが背中を合わせる。
「こちらも連携しないと」
「それはそうに違いないけど……」

枝音は厳しい目を冥賀に向けた。

「……そもそも、どうしてブレイブのスイッチを切らないの？」

「それは……まだ彼が必要だからだ。彼には死んでもらっては困る」

「そうやってまだあなたは、誰かを利用しようというの？」

「そういうことじゃない！」

冥賀は焦れた。だが、今日も自分の感情をどう表現して良いのかわかっていないようだった。

「じゃあ、いますぐブレイブのスイッチを切って！　僕は殺されてもいいってこと？」

「そうじゃない！」

「そうでしょう？　優先順位の問題だ！　スイッチを切れば僕もブレイブも地球人の手で倒されるんだ！　それを……！」

「落ち着け！　兵士ザワンの行動を阻止しよう！　彼は人類そのものの絶滅を狙っているんだ！　あの星……て！　だから、僕は協力して……」

「あんな奴くらい、僕だけで倒せる！　だから……」

「インプラントがあるだろうに！」

「そんなの、実体があるってことくらい知ってるよ！　だから……」

枝音が何かを言いかけた時、左右からブレイブとマリンが襲ってきた。

枝音と冥賀は、背中合わせのまま回転して上昇、なんとかそれをかわす。

「だから……！」
啓は言葉を続けた。
「だから、あんたはブレイブのスイッチを切って、一言だけ言えばいい！　僕を愛しているって！
そうすれば、すべて解決するんだ！」
「……啓……！」
賢人は言葉に詰まった。
これまで言ったことのない言葉である。啓の知らない言葉であった。畢竟、そこに戻ることは誰より賢人がよく知ってい
た。そして、それを利用してきたのだ。
しかし、今本当に啓を愛していると言えるかは……。
「やめろ、啓。今はそんな場合じゃない！」
「そんな場合じゃなくてなんなのさ！　要は、僕がブレイブかってことでしょ！」
「待ってくれ……」
躊躇する賢人に、啓は怒鳴る。
「答えろ！　あと五秒しか待たない！」
啓の迫力は、それが本気だということを示していた。
「3……」
しかし、賢人は口を開けない。

「2……」
ここで反応できないことが、確かに人間の器なのかも知れなかった。
「1……」
ず……。
と、低い音が響いた。
「け……啓」
人間がうめいた。啓の腕が、人間の胸に深く差し込まれていた。
「だから、あなたは本物にはなれなかったんだよ……」
啓の腕から血が伝う。その腕と人間の身体を自分の方に引き寄せると、その唇に口づけた。
人間が血を吐き、啓の口は真っ赤に染まった。
啓は血の滴る腕を引き抜き、素早く人間のスーツの内ポケットから小型の制御装置を抜き取ると、そのスイッチを
った。
ブレイブのスーツがその機能を停止した。
落ちる。ブレイブが。
落ちる。人間の身体が。
「さよなら……」
啓はつぶやいた。

マリンは落ちていくブレイブに向かって加速した。そして、空中でブレイブを抱き留めると、そのまま閉じた。

「……！」

啓は驚愕した。

その驚愕こそがマリンの狙いだった。

しかも、マリンはブレイブを盾にしたまま、啓に向かって突進したのだ。

「何をするぅう！」

啓は吠えた。

そして、ブレイブに向かってマナを撃ち込んだ。ブレイブは一瞬にして蒸発するであろう、凄まじいマナを、である。

事実、ブレイブは塵になって霧散し、美しく風に散った。

と、その塵を目くらましとし、マリンが啓に迫る。

啓はすんでのところでこれをかわしたが、マリンの狙いは最初から啓ではなかった。

「しまった……！」

啓の手からブレイブの本体である剣が滑り落ちる。マリンがたたき落としたのだ。

マリンは空中で一回転し、ブレイブの本体をその手に収めた。

「死者の冒涜(ぼうとく)は趣味(しゅみ)ではないが……君の美しさへのこだわりを見てそうさせてもらった。美しい死を与

てやらなければ気が済まない性格なのだろう？」

マリンは自分の内部のスイッチを入れた。

海中が光り、点(とも)る。没(ぼつ)していたブレイブが、再びその力を取り戻したのだ。

「貴様あああ！」

比呂は色を失っていた。闇雲(やみくも)にマナ球をマリンに撃ち込んでいく。しかし、マリンの方もそれと拮抗(きっこう)す

るほどのものだった。少なくとも、マナのブロックはできている。

「うわぁああああああ！」

しかし、それを無視して比呂は攻撃をマリンに加え続けた。

そんなマリンに、海中から上がってきたブレイブに抵抗(ていこう)する手段など残っていなかった。

「虐殺(ぎゃくさつ)の罪を悔(く)いろよ！」

ブレイブが最大のスピードで迫る。

「死んでも悔いたりなんかしないな！」

比呂は再び手を振り上げた。

まだ抵抗するという構えである。無論その時再び中のマナはブレイブの攻撃に伴(ともな)って消える。だが、それ

でも、比呂は逃(に)げようとはしなかった。

「覚悟したか、比呂」

ブレイブは、高温プラズマ球をその身にまとわせる。

「俺は[illegible]慌ててなんてないね！」

[illegible]振り上げた両手を拡げた。

「それでも、醜く逃げるよりは、戦って散ってみせる！」

吠えながら迫ってくるブレイブの[illegible]に、平手を打った。

、無謀ともいえるその行為は、まったく意味をなさなかった。マナは[illegible]全身の筋肉が硬直状態になっていた。

それでも、ブレイブには――ヒロシには、それはひどく重く響いた。

次の瞬間、高温プラズマ球はマナの身体を一瞬にして蒸発させていた。

塵すら残さずに、跡形もなく消えた。

「勝ち逃げ……された気分だ」

高温プラズマ球が消えた。

ブレイブの手の中には何も残っていなかった。目の前は、静かで、ひどく清涼な気だけがあった。

と、背後から聞こえてきた歓声に、ブレイブは振り返った。

闘技場の観客席から、観客達が身を乗り出して、手を叩き、歓声を上げていた。

それを聞いて、自分が何をしてしまったのかをヒロシは再認識することとなった。

自分は今、[illegible]してしまっているのだ。

何が正しく、何が間違っているか、などということはどうでもよかった。ただ、戦はこれから国を滅(ほろ)ぼす方向に向かっていくことは間違いなかった。

「父上を殺した者を倒(たお)した……それだけなのに……」

そうつぶやいていた。

「仕方無く、戦に出るのは悪いことではないさ……だが、兵達は翻弄(ほんろう)されるだろうな」

マリンがブレイブの横に並んだ。

「帝国には守りたい人、物がある」

「なんとか、戦は止めてみせる。良い条件で和平を締結できるだろう」

マリンはそう言った。

○

「だから、喧嘩(けんか)と戦は違うっての」

リリィと白石(しらいし)は不満げに言った。

白石の宅の庭に繋留(けいりゅう)した飛行船の出航準備を整えつつも、お供の僕はぼやいているのである。

飛行船は白石家の自家用の小型のもので、ちょっとしたヨット程度(ていど)の大きさしかない。リリィは、そのエンジンルームで燃料の他、各部を確かめているのである。

「でも、艦長、普通（ふつう）に自爆しそうですぎゃ」
　神山（かみやま）カンナがマナスクリーンを見ながら言った。
「戦艦は負けたら、どうなるのでありんすか？」
「ぐが」
　大竹美智恵（おおたけみちえ）アルヌールも不安気にしている。が、彼女（かのじょ）たちは艦長用のシートに座（すわ）って何もしていない。が、
のお嬢様はいらだちつつも、リリィとて彼女にできることは無いことを知っているが故（ゆえ）に、強
ことはできない。
「艦隊戦ならボクだって出ていくさ。でもねぇ、一兵卒としてっ戦ちゃ負ける時ってあるってもんさね」
「でも、負けたらどうにもならないでありんす」
と。智美長。
「そりゃわかってるさ。だから、こうして危ない中、船を出そうってんじゃないか」
「戦艦は航行のかぎゃ？」
「違う。ボクらは、あのっ大ところだの何のに関（かか）わって、情報を握っているじゃないか。大本営（きた）からデータ
もらってるわけだし。だから、まぁ、搦（から）め手（て）から攻（せ）めるってぇわけだ」
「搦め手と言いますと？」
「敵艦隊の力てぇやつは、各惑星行の船に中に蔵されている。そういうことなら、敵艦隊の力を絶ってしまえばい
い」

リリィはそう言って、エンジンボックスを閉じた。
「ほんじゃ、マーライ族の村を目指しますか」
そして、リリィは慣れた手つきで飛空艇を離陸させた。
と、そこにマナスクリーンを眺めていたカンナが声をあげる。
「か、艦長なんかえらいことになってるぎゃ！」
「戦争してんだから、そりゃえらいことにだってなるだろうさ。ちょっとまってろ、慌てる
な。今は飛行で手一杯だ」
リリィは振り返らずに言った。
「じゃあ、声だけでも聞いてくださいよ！」
カンナがそう言って、マナスクリーンの音量を上げた。
《我々はまだ反抗している！》
《ブレイブを放逐しろ！》
《陛下を隠匿するな！　魔王はどこにいるんだろう⁉》
《早く！　[illegible]早く魔王を出せ！》
幾人もの人々が声を張り上げているのだった。
飛空艇を上昇させ安定させたリリィが振り返る。
「デモか！」

それは、宮殿の周辺に集まった大衆が、口々に非難して声をあげている様子だった。
「かつて、同じ口で魔王を非難したと思ったら、忙しいことだねぇ、まったく」
リリィは不快そうに顔をゆがめた。
「で、それの何が不安だって？」
カンナに聞き返す。
「だって、どこぞの誰かだったら、みんなの声にこたえて出て行っちゃいそうだと思わないですかぎゃ？」
「あの馬鹿だったら、そんなことはないだろうさ。民衆のためってよりも、自分が正しいと思うかどうかを優先させる奴だからねぇ。とはいえ、それが利用されるようなことがあったりしたら、それは面倒なことになるかもしれないねぇ」
「面倒なこと？」
「ボクだったら、民衆の目の前で王子を処刑して見せようって気になるね。餌はあるんだ、可能だろうさ」
リリィはにやりと笑いながら言った。
「さすが長生き精霊様だぎゃ」
無邪気に笑うカンナをリリィは腕を伸ばしてひっぱたいた。
「余計なこと言わんでいいっての。ボクくらいさわやかな性格も思いつくんだから、悪い奴ならそのくらい考えてるだろうってことさ」

「さわやかって……。そ、それはともかくぎゃ。そうなってほしくはないもんだぎゃ」

「そりゃ、そうさ。誰も望んでないような結末を予測しなきゃならないってのは、嫌なものだよ」

リリィは人の一生について話しているかのようにつぶやいた。

素晴らしき世界

はめられていることには気づいていた。それでも、ここにやってきたのは、阿久斗と戦いた

かったからに他ならない。

一方、マリンも、はめられていることに気づいていた。それでも、やってきたのは、公爵令嬢を通じて要求を

ったからだ。

鍵は『蓬莱の玉の枝』である。ザヴンが作って置いたものだ。帝国最高の山の頂、何もない岩の上。それは、ま

るで自然に生えてきたかのように、ぽつり、と金の枝を輝かせている。

それを挟んで、阿久斗とマリンは向かい合っている。互いに、一歩踏み出せばすぐに『蓬莱の玉の枝』に手が届きそうな距

だ。

「やっぱりそういうことか」

阿久斗は、うなるような声で言った。

「まさか、千年前の『蓬莱の玉の枝』を置いて、迷るとはな」

マリンも同様に低い声をあげた。

「ご丁寧に、お膳立てまでされたってわけだ」

「だが……どうする？　私は、これを使って隕石を止めるつもりだ」

マリンは静かに、しかし、強い意志の感じられる口調で言った。

「それはこちらも同じことだ」

如月真一は答えた。

「それならば、私の立場も同じだ。私に任せるというわけにはいかないかな？」

「その言葉をそっくり返すしかないな。その後に、私に渡すなんて考えたこともないだろう？」

如月真一はにやりとした。

マリンも笑い返す。

「もちろん、民にとって大事な宝だ。渡すわけにはいかない」

「それじゃあ、やることはひとつじゃないか」

「……だが、不要な争いは避けたくもある」

「どうして？」

「これだって戦いのひとつには違いないからだ。見たまえよ、カメラがいくつも飛んでいる」

マリンが周囲を指し示した。たしかに、上空には撮影機が舞っていた。

「勝負によっては、さらに戦争が激しくなるだけ……か。それは確かに、僕の好むことじゃない」

如月真一が言ったが、マリンの言葉を肯定したわけでもなかった。

「それでも、僕は僕の手で事を解決したい」

「それは、君が大切な人を失ってしまったからだろう？　同情しているさ。だが、私とやり合うのはお門違いというものだ」
マリンはそれでも、戦いを拒否する。
と、光の剣を振った。
「そうでもないさ。そちらが大義を背負っているのと同じことでね」
「なるほど、私も民のために意地を張っているに過ぎないな。所詮、私もその程度ということだよ……」
マリンは自嘲的に笑った。その笑顔が、表情を引き締めると、それが合図だったかのように『光の王』は
かって踏み出した。
それを迎撃せんと、光の剣も前へ踏み出す。
「……ふっ！」
マリンが鋭く息を吐き出した。
「……はっ！」
光の剣が吠えた。
光の剣とマリンは同時に突きを繰り出している。
肉がぶつかり合う激しい音。
マリンの右拳を受け流し、光の剣の左肘がマリンの拳を弾き飛ばしていた。
「く……」

阿九斗は一歩下がり、肘に手を当てる。
マリンも手にダメージを受けたのか、一歩下がると右手を左手で包んだ。
まずは互角といったところ。
「結局のところ……魔王の力とは何か、について考えたことはあるか？」
唐突な問いに、阿九斗は聞いた。
「今更それを問うのか？」
マリンはいぶかしむ。
阿九斗は自分の念頭に顔を歪めていた。
「僕は……何かを間違っていたのは確かなんだ。ザウンは魔導の王を置いて逃げた。となれば、妙なことになる」
「それは……確かに妙だ。民は魔導王を前に退かず、ザウンを追うことはできなかったが……」
マリンも不可思議に思った。
「そうだ。つまり、魔導の王はもう必要ないということだ」
阿九斗は断じた。マリンの頬がぴくり、と動く。
「そう……か……もう少し早く気づくべきだったな。魔導王を落とすことがザウンの目的だったわけだ」
が魔導の王を使って魔導王の命だ」
「だろうね。だからこそ、答えろ。魔導の力は何だ？」

剣の死妃の返答に、マリンは答える。

「それは常に考えていた。欠の意思の顕現だと」

「それは確かだろう。だが……それだけでは、どうもおかしいと思わないか？」

「何がだ？」

「君の精霊の力がマナを操ってエネルギーを発現しているように見えるが……？」

「その通り。元よりそのように使うと伝わってきた。そもそも、我とてマナの民の末裔には違いないか

らな」

「だが、我が民が帝国に焼かれた時はそうではないように見える……」

「む……」

マリンもそう言われて考え込んだ。

「一つの精霊の力があるとすれば……？」

剣の死妃がそう言った。

その問いが、マリンの動きを一瞬止めた。

「確かに、辻褄は合う……。『太陽の玉』の一枝によって目覚めた力、マーライの一族の村にあったカプセルに封じられてい

るという精霊の力……。私が使っているのは、マーライの一族のそれだ」

「となれば、改めて問うが、ザウンが『太陽の玉』の一枝を返したのは、何故だ？」

剣の死妃に問いかけながらも、構えを取った。

マリンも思わず構えを取った。が、ひとつ、阿九羅の構えた技の意味をはかりかねた顔をしていた。

「陰陽を落すこと、そのものが目的だったからだろう？　だが、君がそこにこだわる理由がわからない。魔装拳の土の技によって、大地の氣の流れがコントロールされているなら、陰陽で対処できないはずがない」

「それも正しい。だが、君がわかっていないことがひとつある……！」

「なんだと……？」

マリンは顔をしかめる。

「大地の氣の流れでは、魔装拳の土の技でコントロールできないってことだ！」

阿九羅は叫び、拳を撃ち込んでいく。

マリンはその拳を腕で受けるも、後方へ吹き飛ばされる。

「ぐっ……！　そ、そうか……魔装拳の土の技、大地の氣の流れを理解すれば、コントロールは……」

そう告げにマリンはつぶやくが、すぐに首を振る。

「……いや！　だが、たとえそうだとしても、我は大地の氣の流れの力を使いこなしている！」

マリンは阿九羅に向かって突進。拳を撃ち込む。

阿九羅はマリンの拳をガード。後方へ飛ばされる。

「がっ……！　そんな、傲慢が間違いだと言っているんだ！　ザウンは、そんなことがあり得ないと見越したんだ……！」

、再び阿九羅は前進し拳を振るった。

マリンも同時に拳を阿丸に撃ち込んでいく。
二人の拳が空中でぶつかり合い、壮絶な音と光を周囲に巻き散らす。
「あり得ない……だと……？」
「ああ、僕の思いにも、あり得ないね……」
マリンと阿丸は、拳を押し合う形になりながら、にらみ合う。
「どういうことだ？」
「紙一重の力が、互角の拳同士をぶつけ合っての力ではずがない……お前の類い稀な才能をくみ取ったはずだ。お前の渾身の一撃を上手く受け流すなも君を使った。先ほどと同じ間合いなんだろうが！」
その一撃に、阿丸とマリンが同時にやりとする。
「最初に戻ったな。気づいてしかるべきだった」
「対話を重ねたから気づけたのだ。対話は重要だな」
「だったら、ここで二人で抱き合って、世界平和のために祈りましょう、とでも訴えるか？」
「それもいいが……答えは出ているんだろう？」
互いにうなずき合った。
その次の瞬間、マリンの拳が阿丸を襲った。
「この場で勝負しないわけにはいかないな！」
マリンの拳を阿丸が額で受け止めた。

鈍い音が周囲に響く。
九郎の額から血が流れた。
「っ勝った側が、相手に慈悲を、と訴えるわけだ！」
殴り返す。
マリンはかわしきれず、頬に一撃を食らった。衝撃に首がねじれ、吹き飛びそうになるのをこらえる。それを強引に押し戻すと、九郎の頬を殴り返した。
「結局それしかないんだろう……な！」
九郎は頬に拳を受けた。こちらは悪態も首もねじらず、足を踏みしめ、歯を食いしばって正面を見据えたまま、衝撃をすべて受け止めた。
「だが……わかっているはずだ……結局のところ慈悲は破壊に向かうだろう……って！」
次の瞬間、九郎の拳がマリンに襲いかかる。
「たぶん……勝敗がどっちに落ちるかって問題すぎない……な！」
マリンも左を返す。
二人の拳が、同時に音を立てて、双方の顔面に突き刺さった。
肉と骨のきしむ音。
血しぶき。
折れた歯。

それらが衝撃波と一体となって、男の[illegible]から後ろへと突き抜ける。
一瞬、男の巨体の動きが止まった。
「はん……もう味気ない殴り合いって割には痛んだけどね……」
「それが[illegible]な思いというところだ。譲ってもらえるなら、これ以上はしないが……」
マリンは挑発するように聞いた。
男は鼻で笑った。
「冗談だろ……。決着までやろうじゃないか」
そう言いながら、傷をマナで治していく。
それはマリンも同じだった。
このような二人の決着は、[illegible]尽きるまでに他ならない。
男が足を踏みしめた。
マリンが足を踏みしめた。
[illegible]て[illegible]、[illegible]を[illegible]うがった。
二人は数十センチの距離を置いて、真っ正面から向かい合った。
「やるか……」
「[illegible]、こちらもそのつもりだ」
マリンからが先だったか、男からが先だったかはわからない。

二人の拳が画面で交錯(こうさく)し、互いの頭部を激しく揺(ゆ)さぶられはじめた。

○

「強い男ってのは、鹿島の食欲も上がるものなのかしら？」

淑恵(よしえ)が、モニターに映し出された画面のマリンの対戦を見ながら言った。

「少なくとも、何か実はふたつある以上はそうでしょう」

ころねが答えた。

「でも、どうして二人が殴り合っているの？」

ゆう子(こ)が、怯(おび)えながら聞く。

「それは、鬼の鹿島からということで、結論が出ています」

冷淡(れいたん)に、ころねが言った。





木下悠人が困惑している今日一日だけなところねがやってきたのが[illegible]ことだ。死霊王ザウンの呼び出しに応えに一人で説得してもらおうとやってきたのである。
けなは友人、行くなら自分もついていくと主張したが、これにばかりはさすがのころねも真剣に[illegible]
ることとなった。
「江藤不二子さんのことを見てからは……自分も軽率なことはできません」
と、ころねが告げたことから、木下悠人も江藤不二子の死を知ることとなったのだが、それを悲しんでばかりはいない。冷静さが判断だけはあった。
皆が悲しみに沈む中、木下悠人は江藤不二子の残した資料を分析することにしたのである。
その結果、死霊王たちが議論していたことの情報となるようなことが判明していた。今は、死霊王たちが出した結論を説明する時だった。
「最初から説明する必要があるんだけど……さ」
木下悠人はそう言って、回線を開いた。ブレイブと、船内のリリィのヨットに対して、である。彼にも状況を把握してもらう必要があった。
《聞いてるよ》
リリィから答えがあった。ブレイブも持ち場にあるのか言葉こそ発していないが、息づかいで答えがあった。
木下悠人は続けた。
「いい？ 魔術の力ってのは、マナ回路の働きに依存した、超常的な力てことなわけ」

《んで、皇帝(こうてい)の側近がそいつを操ることで権力を握(にぎ)った……ってわけだ》

リリィが答えた。

「そう。そして、その際に作り出されたのが『蓬莱の玉の枝』『燕(つばめ)の子安貝』というわけ。同時に、魔術師の力の危険性についても

言及(げんきゅう)されているんだけど、これが〝人類を滅亡(めつぼう)させかねない〟という曖昧(あいまい)な表現が使われてい

るの」

《現状、あんまり嘘(うそ)や大げさな表現じゃなかったみたいだねぇ》

混ぜっ返してはいるものの、リリィの声は真剣だ。

「そういうこと。で、ここからが推測になるんだな。魔術師たちが力を使いこなす人間の脳の研究が進んだわけ。その結果、

マナ。太古の魔術師たちね。それが成功してから、人類はマナの時代へとなだれ込んでいくの」

車内の空気が重苦しく、周囲が静まりかえる。

《それらが完全に秘匿(ひとく)された歴史となるわけだ》

と、リリィが言って、はじめて沈黙(ちんもく)が破れた。

「だって……学校ではマナの時代の発祥(はっしょう)とだけ習ってたわ……」

ゆう子がうめくように言った。

「公式アクセス権のあるデータベースにも見つかりませんね」

ころねがうなずく。

「そして、元の精霊の力の研究も含む精霊術や人間の研究は、すべて異魔術とされた……。魔王についての儀式や祈祷による信仰などは、思えば、精霊の力に繋がることだものね」

精霊は言いながら、平気で残してくれた資料を確認する。

《だが、異魔術師は残っていたじゃないか》

リリィの問いに、精霊は即座に答える。

「けれど、精霊の力の本来の性質を知っている者はいなかったでしょう？　これは推測になるけれど、マナの本来の性質を偽装ったテーマパークとしてマーライ族なり、精霊の力を使える一部の人間が逃れて[illegible]になったんじゃないかな」

《……え？》

リリィは驚きの声をあげた。

「しかし、そう考えると、様々なことの辻褄が合いますね」

ころねが首肯する。

精霊もうなずいて、先へ話を進めた。

「そうなると、以前にマリンの言っていたふたつの精霊の力ってこともわかるわけ。マリンやノニエラが使っている精霊の力と、本来の精霊の力。封じられていた精霊の力そして、人間たちが使っている世界を滅ぼしかねない精霊の力」

「それです。そこに何か違いがあるというんですか？」

ころねがデータに無いことが気になるのか、珍しく純粋な疑問を口にした。

「おそらく……『円環の理の外』に封じられていた魔獣の坩堝の力、外宇宙から来たものだね」
《外宇宙！》
思わず声を上げる、リリィも再度驚く。
「まだ確証はないけれどね、一方人々の願いを叶えている魔獣の坩堝の力、それこそが我々の研究の対象であると言えるのじゃないかな」
「では、鹿目さんたちが殴り合っている理由は……」
ころねがつぶやく。
沙々は悲しげに首を振った。
「その通り。神同士が同じ結論に達したということだね。人々の意識の総和であるマナに干渉されない、新たな力を生み出すを許容している……と」
《じゃあ……鹿目さん、人々が望んだ結果だと？》
「そういうことになる。たとえそうでなくとも……魔獣を消失させることができるかどうかはわからないってわけ」
織莉子はあきらめたように言った。
「でも……」
その時声をあげたのはけいなである。
「でも、みんなが魔獣を消そうと望めば……できるんじゃないかな？」

け一なは祈るように手を合わせ、真剣な表情で言った。
想いはわかっている」とでも言いたそうに首を縦に振った。
「もちろん……もちろん、そうあって欲しいけれど……」
どれだけの人が、この状況の中で相手を許すことができるだろう？ そして、何人の帝国民が何を
ているかは、手に取るようにわかるのだ。
重苦しい沈黙が満ちる。
それを破ったのは、気楽なリリィの声だった。
《なるほどね…… じゃあ、ボクは、とりあえずマーライの族の村の状況が安全か調べればいいわけだね
って》



「え？」
思わず素っ頓狂な声が出た。
《だから、マーライ一族の村を調べるって言ってるの。ええと、あれだよね？ マーライ一族の塔にある封印のカプセルにして、〈星行船〉》
リリィが軽い調子で言うので、思わずそれには答えざるを得ない。
「そう。それが『二つの秘宝』。残りのふたつは『火鼠の裘』と『龍の首の珠』」
《そっちはどっちも魔法に依存して存在しているものなんだっけ？》
「そ、そういうこと……。『火鼠の裘』は死後の世界への扉を開く……ってことらしいね。これは手に入れている。上級の死霊術……ってことなんだろうか？ もしかしたら死を越える装置なのかも。そして、も
う一対、ピタハウゼンのことだね。魔力を戦闘力にして、デバイス、さらには道標……そ
んなところになるかな……。まとめると」
思わず答えたが、それに続いて、リリィにこう尋ねずにはいられなかった。
「ねえ、それで、どうするつもりなの……？」
《いやね、何もせずにいるってのは、性に合わなくってさ》
リリィが照れたように苦笑する。
「でも……」

《もうほとんど謎はない……とも言える状況だけど、異世界の成り立ちと魔素の力の関係……そのあたりを探れば、隕石の正体だってわかるって可能性もあるさね》

感想を一言も返さずにいると、リリィの独り言のような言葉が続いた。

《ま、しかし、個人的には一暴れしなくちゃ気が済まないってとこだけどね》

。

ひとまずは通信を終えたリリィは、生徒会長を振り返った。

「お前さぁ、もしかして死ぬかも知れないってのは嫌だよなぁ？」

いきなりそんなことを言われて、正人は面食らった様子だった。

「嫌でありんすよ」

「嫌だぎゃ」

「ぐが」

「そりゃ、そうだよなぁ……」

リリィはヨットの船室の天井を見上げた。

「でも、なんでそんなことを聞くのでありんすか？　そ、そりゃあ、隕石が落ちてくるっていう

こともありんすけど……」

美智恵は思わず聞いた。

「そ、そうぎゃ。縁起でもないぎゃ。なんとかなる可能性があるかもって言ってたのは医者の方ぎゃ」

カンナも慌てる。

「いや、さぁ……。もしかしたら、今日のこの行程で、行き着く先が今までと違っているんじゃないかって思えてきてねぇ」

リリィが珍しく弱気な声を出した。

「いやですぎゃ。医者がそんな弱気な」

カンナがそれを笑い飛ばそうとした。

ふと、リリィが真顔でそちらに向けると、カンナの笑みが硬直したが、今度はリリィが笑いはじめた。

「あはははは……」

「へ……へへ……」

美智恵も引きつった笑みを顔に浮かべる。

「ぐがぐがぐが……」

笑っていいのか？　と確認するように、控えめにアルヌールが声を上げはじめ

はじめた。

「いやね、まぁ、あれだよ。死ぬときは一緒だって言いたいのさ」

リリィの苦笑が不敵な笑いに変わる。

「い、いやでありんすよ、長老」

「そうだぎゃ。今更（いまさら）……」

「ぐが」

長老が不敵に笑ったように答えた。

と、ヨットのオートパイロットが警告音を発した。ヨットが無線圏内に入ったのだ。

「い、着いたか……」

リリィは言い、長老を促（うなが）した。

着陸したのは、マーライ族の村の広場。

「しかし……妙だぎゃ」

モニターで村の様子をうかがっていたカンナが言った。

「人が……いないでありんすね」

長老は真剣な表情でうなずく。

「危険はないようだが……」

モニターをチェックして、リリィはヨットのハッチから外に出た。

「ともかく、静かすぎる」

リリィは周囲を見回した。

マーライの一族の村は、周囲を森に囲まれた自然豊かな土地だ。家々も素朴で、見ようによってはみすぼらしい。が、今気になる

のは、やはり、まるで人がいないことだ。たとえ家にいたとしても、ヨットの接近に顔くらいは

してくるものだ。

「住人は結構な数いるはずだが……」

リリィは、一段と警戒するように周囲を見回した。

カンナが身を低くし、耳をそばだてる。人間より耳と鼻が利くカンナである。

「あっちだぎゃ……」

その指さした方向、森を抜けた向こう側。

「そっちに何が?」

「人の声……ノニモラの……喧嘩の声ぎゃ」

「……犬、というと、ザウンでありんすか?」

全員、言葉少なに急いでそちらに走り出した。

行く先には、塔が見える。

「……塔って、ことは……」

リリィはつぶやく。

射出カプセルにして、〈星行船〉の燃料の供給源である場所である。

「ザウンは、まだ何かを狙っているってことかぎゃ?」

カンナの疑問に、リリィは目を輝かせた。
「なら、まだ向こうには何かやり残したことがあるんでありんすね？」
「それなら……。何かまだチャンスがあるってことさ！」
リリィは、にやりと笑った。
再びリリィは、塔の下部にある闘技場へと滑り込んだ。
まさに、そこで、ザウンとノニモラが争っていた。
「やっぱり村をねらっていたのか！」
ノニモラが闘技場の入り口前に立ち、槍を振り回している。
「念には念を入れて……ということだったが、どうにも後手に回ってしまうな」
ザウンは、じりじりとノニモラに近づこうとしていた。
その時ザウンとノニモラは、接近してきたリリィらに気づいた。
「新手か？」
ノニモラは、鋭い目をリリィに向けた。彼女はまだリリィのことを知らない。
その気配に気づいたリリィは、手にはめたグローブをはたいて、パンッと音を立てた。
「いんや、助太刀さ」
再び後方から歩み出る。
「うちらもいるでありんす」

「ぎゃ」

「ぐが」

双方、戦闘態勢に入っている。カンナがすでに獣化を済ませており、魔導人形のアルヌールが妨害を展開しはじめていた。

「ふう、囲まれたか」

ザヴンは首を巡らせた。

生体とのコンビネーションはさすがに慣れたもので、ザヴンを隙無く囲んでいる。

「さて……大人しくしてもらおうか……」

リリィが、拳を構えた。

「この身体、この戦闘では、そもそも勝てそうにはないな……」

ザヴンは、素直なことを言った。

それでも、この状況、不敵に笑った。

「とはいえ、無理なこともある……なんとかはなるだろう」

「何が無理だって？ あんたにゃ逃げ道なんかねぇってのにさ……」

リリィがニヤリと笑う。

「それは、いずれわかる」

ザヴンは言ったが、その言葉が終わる前に、リリィが攻撃を開始する。

「そうか……よっ！」
風を切る音。
それよりも素早く伸びたリリィの左手がザウンを襲う。
「ちぃ……！」
ザウンはこれを必要最小限でかわした。
リリィは不敵に笑う。
「ふっ！」
彼女が気合いを入れると、なんと、伸びていた腕がかくりと方向を変えた。
「なんだとっ……！」
軌道を変えられた腕は、跳んだザウンの進行方向へ変更している。
「ぐわっ！」
再度襲いかかった拳を横から受けて、ザウンは吹き飛ぶ。
「ボクの得意技はこんなところでね」
リリィが歯をむき出した。
空中に飛ばされたザウンは、それでも体勢を立て直すと、地面に四肢で着地し、リリィに驚きの目を向けた。
「この地域にマナはないはず……」
「ヨットで来たんだ。マナ蓄積機を動力に持ってきたさ……！」

リリィは、さらに一撃(いちげき)を放つ。

確かに、数発も持ってくれれば魔術を行使することは可能だ。周囲はすでに濃(こ)いマナに満ちている。

だが、それは敵にとっても同じだった。

「そういうことなら、こちらも同時に戦える！」

リリィの一撃に対し、ザウンはマナを使用してシールドを張った。

鈍(にぶ)い音とともにマナの光が弾(はじ)ける。

しかし、リリィは余裕(よゆう)の表情である。

「同時、同時じゃないさ……！」

リリィは一度防がれたシールドに、何度も攻撃を加えはじめる。

「うおっ！」

ザウンが驚愕(きょうがく)の声をあげた。シールドごと衝撃(しょうげき)で吹き飛ばされたからである。

「おおっ、やるな、お前」

ノニモラが浮かれた声をあげた。

「自分の魔力をなめるんじゃないってね」

リリィは自慢(じまん)げに帽子(ぼうし)に手をやった。

「さて……あんたにゃ聞きたいことが山ほどあるぜ」

リリィは指をパキパキと鳴らしながら、ザウンに歩み寄る。

ザウンは、ダメージがあるのか、その口の端から荒い息を吐き出している。
「ふん……もう勝ったつもりか？」
強がりなのか、それでもザウンは皮肉っぽく言うが、リリィは意に介さなかった。
「すでに勝ってるさ。ったく、ころ相手なんざ勿体なくって……ね！」
叫び、次の一撃を放つ。
その凄まじい衝撃は、一瞬にしてザウンのシールドを突き破った。明らかに怒りで威力が増している。
「うおわっ……！」
さすがのザウンも狼狽した。
リリィの拳が一瞬にしてザウンの眉間にめり込んでいる。
狼男の声が悲鳴に変わった。
「ぎゃぁあ……！」
ザウンは額を押さえつけられ、顎を地面に叩きつけられ、その反動できりもみしながら上方へ跳ねる。
浮び上がったザウンの身体を、今度はリリィの拳が捕えた。
手刀で顎を突き上げ、そのまま喉笛を締め上げる。
「ぐおっ……」

ザウンは、喉を無造作に宙に持ち上げられてうめいた。

「はん……只の乾物だね、こりゃあ」

リリィがあざ笑う。

「おおっ、内容を[illegible]ひと[illegible]ぎゃ！」

「ちょっと、怒っているでありんすよ、これは！」

カンナと[illegible]盛り上がる。

「まぁまぁ、騒ぐな、騒ぐな。ざっと[illegible]」

にやにやしながらリリィは、さらにザウンの喉を締め上げる。

「ぐ……げ……」

ザウンはうめく。

リリィは聞いた。

「そんじゃ、話してもらおうか。まずは、あんたが何者かってことからさ……」

「ん？　どうするつもりだ？　殺さないのか？」

ノニモラが歩み寄ってきて聞く。

「状況が入り組んでてね、聞いておくことがあるのさ」

リリィはそう説明してから、右手をザウンの首に添えると、その身体をゆさゆさと揺すった。

「くっ……くそっ……」

しばらくザワンはうめいていたが、の本体はうまく抵抗できず、やがてあきらめたのか、不遜な調子で語りはじめた。

「こうなっては仕方ない……。何を聞きたい……と？」

「つべこべ言ってるんじゃないよ。お前が何を知っているか聞いてるんだ。答えろ」

リリィが、ぐい、と力を込めた。

「く……。私は、君たちの言葉で言うところの『宇宙本体』ということになるだろう……」

「宇宙本体？」

リリィにとっては、予測できたことではあるものの、聞いてみるとやはりそこに驚きがあった。他の者にとっても、それは同様で、一様に目を見開いている。

「そういうことだ……」

答えるだけは答えた、というように、憮然とした態度でいるザワンに、リリィはさらに質問を浴びせる。

「改めて聞くんだが、宇宙は膨張を終わり、収縮に向かう……」

「否定はできない。そうだったな。だが、その収縮の先にある……別の宇宙として、だ」

ザワンには余裕が出てきたのか、怯えていた口調が変わっていた。

「つまり、この世界全体は、膨張を終わっている」

確認するようにリリィは言った。

「そうだ。世界そのものは、そこまでしかない。他の世界は異次元のようなものだ」
「すると、その壁を破って……世界を飛び越えてお前達がやってきたというわけだ」
「そうだ。だが、やってきたのは精神のみ……。お前の言っている魔法の力というのは、異世界の精神の力を使うことなのだ」
「待て……魔法の力は異世界から来るんじゃないか？」
リリィは問う。
「そうだ。我々……日本人の精神は、この塔に保存されていた」
ザウンは、その行動範囲内ではあるが、塔に向かって首を振った。
「それが、ノニモラとマリンの使っている力だな」
ノニモラが言った。
「そうだ。だが、それを制御するために作られた『蓬莱の玉の枝』は、魔法の力を自在に解放することもできるものになってしまった」
ザウンの言葉に、リリィは嫌な予感を抱きはじめた。
「魔法の力の正体……つまり、今の世界の日本人達が使っている魔法の力は、やはり人類の魔法の力なんだな？」
戦慄とともにリリィは問う。
人類の魔法の力……魔法の力を使うということは、精神そのものを、生きているうちにエネルギーとして使うということが何を意味しているのかということになると、想像もつかないが、それが良いことであるはずがない。

「そうだ。かつて人はそれを制御し得ないとして封印した。だが、今になって偶然にも復活したというわけだ」

笑うように、ザウンは語る。

「制御し得ない……」

「ああ。私は、私の種族の最後の生き残りだった。私の種族は滅んで、魔族の力となったのだ。そして君たちのカプセル……『燕の巣』の中に詰められることとなった。私は、そこから分離した精神体なのだ」

ザウンの口調に反し、それは恐るべき内容だった。

「滅びだ……。そして魔族の力……。どうして滅びだ？」

「もちろん、我々の世界をも、魔族の力を利用しようとしたからに他ならない」

「すると、まさか……」

「ああ。魔族の力に意思はないはずだが、どういうわけか、その力は種族を滅ぼそうと働く。もしかしたら、どの種族も憎み合って自滅するという程度の意思かもしれないが」

「ということは……」

リリィは、背筋に冷たいものを感じた。

それを肯定するかのように、ザウンは笑った。

「ははは……！　そうさ！　それは人類を滅ぼそうと働く。今もそうなっているだろうに！　魔族の力が今の時代だものだ」

一個体の生命、さらにはノニモラも大差なかった。
「だが、他の種族を滅ぼしたところで得る物など無いんだぞ！　破滅の惑星か？」
ただリリィだけが、そう聞いた。
それをザウンは笑い飛ばした。
「ははっ！　そんな、佐倉啓じゃあるまいし。無限の力、その因果内においては無限なる力として働くが、ひとつの種族が滅した時その無限の力は可能性の外へと放出される……　すなわち、存在する、とでも言おうか」
「すると、人類が滅したなら……」
「その通り。無限の力は存在する。私はこれを解放してやれる……　いや、もっと俗っぽい言い回しにするならば、成仏すると解釈している。自分の種族の精神は、ただの力として使われることを良しと思わぬのは理の当然」
ザウンは、おかしくて仕方ないというように笑いはじめた。
リリィたちは自分の背筋が冷たくなるような感覚がしていた。これが本当にあれば、なんともおぞましい運命が自分たちを待ち受けていることになる。人類が滅び、無意識の存在になってこの宇宙をさまよい、やがて別の宇宙の生命体
しにかかることになるのだ。
「なんだ、そりゃあ！　冗談じゃないぞ。そんな、呪いのような……！」
目の前のザウンに対してでなく、いや、誰に対してでもなく、リリィは吠えた。
しかし、それをザウンがあざ笑った。

「はん！　そうさ、呪いさ！　当主そのものが呪いみたいなもので出来てるのさ！　わかったならおとなしく滅んでおけ！　もう止められるものなどない！」

勝(か)ち誇(ほこ)ったように笑うザウン。その首を伸ばした一手、リリィは力を込めた。

「笑うなよ……！」

「ぐ……」

ザウンの顔色が変わった。少しとはいえ、それとわかるほどに赤紫(あかむらさき)色に変わっていく。

その首を締め付けるリリィの手に、筋と血管が浮かび上がる。

「つまり意識ってことは、死んでも問題ないってわけだな……？」

「ぐ……は……は……その通りさ。殺すなら……それでも何の問題も……」

ごきり、とザウンの首の骨が鳴り、それきり決してしゃべらなくなった。

「か……長老会……まだ聞ける話があったかも……」

幾人かの長老が戸惑(とまど)いながらも言ったが、リリィは厳しい目でにらみ返した。

「もう十分だろうが。マナの、源泉の神の信仰(しんこう)、皇帝(こうてい)の一族が守ってきたもの。すべてが繋(つな)がった。あとは隕石(いんせき)をどうするかだ」

リリィはまだ何も見えぬ夜空を指差した。

「まさか……みんな姉妹をこのまま死んでしまうでありんすか？」

幾人かの長老が不安な声をあげた。

○

「本当はどうかと思うけれど、避難するべき……だろうね」

リリィから情報を聞いた博士は、淡々とそう言った。

クールな性格ではあるが、緊急事態にあっても狼狽しないのはさすがと言うほかない。

「避難って……どこへ逃げるって言うんですか？」

ゆう子が震える声で聞いた。こちらは完全に色を失っている。

そもそも地球防衛軍はほぼ全滅状態となっていた。戦況は悪くなる一方であり、マリンが止めると誓った異星人の侵攻

まるで衰える気配はない。いや、確実に異星人の軍勢による攻撃は強まっている。ただ、地球の抵抗力による色ない

の雨は、今も帝国に降り注いでいるのだ。それだけ異星人の攻撃の圧力が増しているということでもある。

「ま、地球はもう駄目だよね」

博士はそう言って、隕石が衝突した場合のシミュレーションをマナスクリーンに表示した。

地球に衝突した巨大隕石は、大気圏を突き破るほどの爆発を起こしたあげく、地殻そのものをめくりあ

げていた。円形に拡がった衝撃波がぐるりと地球を一周し、世界中の火山が噴火のごとくに噴き上がる。要するに、地表は荒らさ

キロの範囲内では全滅するということだ。そして、上空百キロから上はほとんど影響が及んでいない。

「宇宙に逃げると言っても、乗り物を持ちませんが……」

ころねが言った。

月はあった。地上はほぼ崩壊している。宇宙ステーションもその機能をほぼ失っている。

「まあ、聞いてくれよ。本来は三百年の極限サイクルに考えた結果なんだ。つまりその……説明すると長くなるんだけれど、生き残ったという意味で生き残ったのは、曽我氏だけなんだ」

彼女がそう言った。

「えっ？」

ゆうは言葉に詰まった。

けーなは衝撃を受けた表情で、振り返ると、身を乗り出した。

「ちょ、ちょっと、そんなわけにいかないよ……どういうことなの？」

しかし、彼女は静かに首を振った。

「だから説明すると長くなるって言ったじゃないか。まず、私が立てたあの仮説が正しいとする。その……この世界は、誰かが作った虚構なんじゃないかという仮説だ。とすれば、その鍵は時間軸に他ならない。時間軸、それと並行して、その種のアイテムを使う。結果、彼女を生き残らせることで、人類の未来を守る結末を防ぐ」

「しかし、どうやってそれを行うのですか？　一度だけ……」

ころねの言葉を彼女が遮った。

『ノスタルジー号』を利用して時間遡行用カプセルだ。ゆうはこれに入ってもらい、コールドスリープ状態で時間を巻き戻してもらう」

「え……」

けーなは絶句した。
それを聞いていた[illegible]スハラ二ー[illegible]がざわつく。
「そうすれば、おそらく[illegible]できる」
[illegible]言った。
「一年て……！　なにそれ？　じゃあ、他の人はみんな死ぬの？」
ゆう子が錯乱して騒いだ。
これにも[illegible]うなずいた。
「だから、死そういう風に考えてはいけないってことだ。[illegible]正しいならば、[illegible]あり、そこに『火鼠の裘』を使って脱出できるわけだからね」
「え……じゃあ……」
けーなが何かわかった、というような顔をした。
「そう。そこに脱出できるのは、魔王だけだ。[illegible]してはこうなる。[illegible]ステーションに、[illegible]
、王そして『[illegible]の『[illegible]』『龍の首の珠』[illegible]を持ち込み、そして、[illegible]コールドスリープに入り、隕石爆発後[illegible]へと向かう」
「他の人はどうするの」
ゆう子が聞いた。
「私も含めて、死ぬ。[illegible]すべて。オール」

淑子が冗談めかして言った。

「ちょ、ちょっとそんなの……」

「抵抗はあるのはわかるわ。しかしね、やるしかないわけよ」

彼女は断言した。

一同、しんとなった。

その空気を破ったのは、けいなだった。

「ねえ、でも、死後の世界に行って、あーちゃんは何をするの？」

「わからない……」

「え？」

「わからない。会えるか、連れて帰るのか……どうにもならないのか……一人だけ帰ってこられるだけなのか」

彼女はそう言って首を振った。

「ちょ、ちょっと……そんな無責任な……」

ゆう子が不満の声で抗議した。

「そりゃ、個人的には反対だろうけど……。それ以外の手段ってないんだもの」

彼女は肩をすくめた。

○

殴(なぐ)っては殴られ、殴られては殴り返し……。

互(たが)いに何度それを繰(く)り返(かえ)しただろうか。

紅丸とマリンは、何度も同じ間合いぬ、傷を体中に浮(う)かべながら、それでもさらに互いの傷を増していく。

一撃一撃どれもが骨すら簡単に砕(くだ)くものだが、それを幾(いく)発も喰(く)らい続けている。

「結局勝敗を決められないで、何の進展も無し!」

「女の恨(うら)みで清姫(きよひめ)伝説に出るよりはマシだろうに!」

「これに勝っても何一つ手に入らないんだぞ!」

「八つ当たりよりは有益だ!」

それでも、二人とも拳(こぶし)の速度も威力も落ち始めていた。

一度殴(なぐ)っては休みながら、肩で息をしはじめていた。

「そろそろ……体力が尽(つ)きてるんじゃないのか?」

「そっちこそ、顎が上がっている。鍛(きた)え方が足りないな……」

紅丸とマリンは悪態をつきあい、さらに腹へも一撃を加え合った。

「しかし……もう滅びるかもしれないって時に……殴り合(あ)いとはな」

マリンが言った。

「昔の神様が存在やってきたなら……　魔族と人間の国は結託して、今も存在……　なんて話があったもんだけどな」

死神は皮肉めいた笑み(え)を浮かべた。

「そりゃあ、嘘(うそ)だったってわけだ」

「賢者(けんじゃ)がいて……　あるいは純粋な魔法使いが国を導いているがいて……　それで世界は繁栄するって話があった」

「そいつも嘘だったってわけだ」

「切なくもあるが……　どうでもいいな」

「感傷だ。ところで、そろそろ限界じゃないかね？」

マリンが荒い息とともに、そう吐き出した。

「まだ余裕」

死神は息も絶え絶えに言った。

「嘘つけ」

「……それじゃあ、決めるか。自国家に対しての意地と、女が死んだことへの八つ当たり、どちらが強いのか」

死神が言うと、血が流れた唇(くちびる)でマリンは微笑(ほほえ)んだ。

「ああ」

二人は拳を振り上げた。

周囲の空気がうなり、轟音(ごうおん)を立てた。

ふたつの渦(うず)が巻き上がり、それがぶつかり合って竜巻(たつまき)になった。

その中央には、拳をぶつけ合っている二人。

血しぶきと肉片（にくへん）と骨の欠片（かけら）が、竜巻に混ざる。

数分は続いたろうか。

ふと、二人の動きが止まり、竜巻が消えていく。

ぼろぼろになった魔人の姿が現れる。

魔人もマリンも、その体は原形をなしてはいなかった。ただの肉塊（にっかい）と化したそれを互いの顔に押しつけていた。

魔人の膝（ひざ）が折れて、揺らぐ。

しかし、それより早く、マリンが背後へと倒（たお）れた。

ずん、と土煙（つちけむり）があがる。

マリンは、呆然（ぼうぜん）として空を見上げていた。

「国取りも……八つ当たり……か」

マリンがそうつぶやく。

「それが望んだことなんだろうさ……」答える。

魔人の足を地面から引（ひ）き抜（ぬ）くと、『英雄の王』に歩み寄り、それを手に取った。

「これからどうするんだ？」

マリンは聞いた。

「無駄（むだ）かもしれないが……それでも、阻止められるかどうかやってみたいね」

阿江はそう言った。

○

しかし、事態は彼らの思惑（おもわく）とは斜め方向へ進みつつあった。

あれからブレイブは、戦争を止めるべく、何度も積極的にマリンの妹の説得を試みていたのだが、それが功を奏したのは、結局のところ、存在を認めてからであった。

「……わかりました。ここは軍を退きましょう」

マリンの妹――つまり女王はそう言った。

ブレイブは「わかってくれたか」と喜ぶ気持ちにはなれなかった。偵察機から送られてきたデータを女王と閲覧した結果のことである。

さらには、モニターでマリンの敗北を見た後の反応である。ブレイブならずとも、良い心地はしない。

「今更（いまさら）……とは言いたくないけどな」

ブレイブは女王にそう言った。

只今、女王の御座艦（ござかん）のブリッジで向かい合っている。交渉（こうしょう）のために女王が招き入れたのだ。

女王は、しかし、穏（おだ）やかに微笑んだだけだった。

「それが海というものですよ」

「ともかく、隔壁に対して内部の共鳴戦術……」

ブレイブの言葉を、彼女が遮った。

「我々は海面へ戻ります。生き残る可能性も少しはあるでしょう」

「え……そんな……！」

「隔壁を止められる可能性は、我々の技術を以てしても、ほぼゼロ。それならば、我々は生き残る道を選びます。海溝は数千メートルの深み。破壊の及ばぬ所であるに違いありません」

「しかし……」

ブレイブは食い下がるが、彼女の表情は変わらなかった。

「それが海というものですよ。ところで、あなたも名誉乗員として招き入れることも可能ですが？」

彼女の言葉に、ブレイブは首を横に振った。

「遠慮します。こちらはこちらで……」

絶望的な表情の艦長たちを残して、ブレイブはその場を去った。

5　さようなら人類たち

阿久斗とヒロシは、もちろん、淑恵の言葉にすぐには首肯しなかった。

「まだ隔離を止められるかもしれない」

「それはアニキに賛成だな」

ヒロシもそう言って、精一杯の抵抗をした。

「しかし、だ。少なくとも『運命の王杖』による制御は受け付けなかった」

淑恵は、冷淡に言った。

先程からずっと、けなげに『運命の王杖』をステッキのように振ったり、わけのわからない呪文を唱

たり、念を込めたりと、頑張っているが、マナで出来る程度の魔術が行われるだけで、肝心の制御ということは起きはし

なかった。

「それはわかるんだ。でも……」

「言いたいことはわかる。あきらめるなんて性に合わないだろうからね。しかし、隔離をどうに

かする物理的な手段は何もない」

「それほどまでの無力というのはきついのかい？」

「そうだよ。一個の種族の魂の集合体の意思の力。それこそ生きている人類が一人しかいないというような状態にならないと……」

「じゃあ、人類の意思をひとつにできれば……！」

素晴らしい思いつきだ、というようにヒロシが目を輝かせた。

それを瞬時に彼が否定した。

「今回の世界の人間も全員の意思を統一するなんてできなかったし、そもそもアイナの故郷の地球の人類の意思の力は変えられない。恐ろしい呪いだと思うよ。今の

ってのはさ」

「それじゃあ、僕たちは何もできないのか……？」

「だろうね。とはいえ、少なくとも、時間を巻き戻して何をやってもいいんじゃないかな」

彼は感嘆のため息とともに言った。

「え？　どういうことだい？」

「時間軸の上で、人の死後の世界に行ってもらうという契約がある。それまで死んでもらっては困るわけだ。もちろん、

コールドスリープに入ってもらうんだから、その前後で傷ついてもらっては困る。ヒロシ君はブレイ

ブとして、軌道までカプセルを運んでもらう役目もある。だけど、それ以外の者は、それ以前に実際に死んでしまうよう

なことをしてもらって構わない」

「なんだかバカバカしく響く話だね……」

彼は困惑気味に言った。

「そりゃ、最後は各自で死ぬ覚悟をしろってだけだからねぇ。ともかく、その執行猶予期間というのも、もの
には頭上から落ちてくるからだけどね。その時までは……各自有意義に過ごすといい。殺し合いだってOKだよ」
地獄は、すくと肩をすくめて、精一杯冗談めかしてって言った。

○

「まだ納得できない」
ぼやいたのはリリィである。
生徒会室に置いてあるテーブルの上には、駄菓子などがどっさりと山積みになっている。その前に生徒会役員が並んで座り、菓子をお
さぼりつつ食べているというわけだ。
「そりゃあ、最後の晩餐がコンビニ菓子なんですからねぇ……情けないでありんす」
美智恵が言うと、リリィは苦い顔をした。
「そうじゃねぇっての。抵抗する手段がないってことにだよ」
「でも、どこの店も閉まってて、最後の晩餐にはふさわしくないものばっかりだぎゃ」
カンナも文句を言った。
「うるせぇなぁ。死刑囚でもない限り、最後の食事もんなんかろくなもんじゃねぇんだ、大体食べた
ら何か食いたかったんだよ？」

リリィが問うと、料理長カンナは考え込んだあげく答えを出した。

「ご飯と、お味噌汁」

「レアステーキ、ポテトをつけて」

それをリリィは鼻で笑い飛ばした。

「そんなもんじゃねぇか。だったら普段と何も変わらん。普段はソーダ類を飲むことを気にしていたら食べないんだから、食べ放題なんて二度とないぞ。食え」

「そういえば、そうだぎゃ」

「メロンパンってカロリー高いんでありんすよねぇ……」

そう言いながら、巫女妖精たちはむさぼり食いはじめた。

「ぐが」

一方、問題のアルヌールは何も手をつけていない。

「そりゃ、キミは何も食べないわな……って、魔王陛下」

リリィが驚きの声をあげた。アルヌールの背後から、ひょいと魔王陛下が顔を出したからだ。

「いやぁ、やることが無くなって、わしも昼食を食べに来た」

魔王陛下はポテトチップスに手を出す。

「魔王陛下は何もやることはなかったんですか？」

呆れ気味にリリィは問う。

「この年齢になると、[illegible]からも依頼なんてないもんでなぁ。暇になってしもうた」

[illegible]ぼやいた。

他の神様たちは少しでも人間たちのパニックを収めようと、[illegible]と呼ばれて奔走している最中なのである。

「だからって一緒に過ごす家族がいないんですか？」

「いやぁ、もう何千年も生きていると、そんなもんはねぇ……」

カラカラと[illegible]笑う。

「とはいえ、うら若き乙女たちが最後の時を知りながら過ごす相手の男としては、若くなくて申し訳ないのぅ」

「いえ……」

リリィは苦笑を浮かべたが、カンナは空気を読まずに騒ぎはじめた。

「そうだぎゃ！ 男がいないのは許せんだぎゃ！」

「ぐが」

アルヌルがたしなめたが、[illegible]でそれに乗っかる。

「そうでありんす！ 恋人の一人もいない[illegible]たのが許せないでありんす！」

「ぎゃ、ぎゃ」

「騒ぐなよ。ボクらに釣り合うほどのいい男がそうそういなかっただけさ」

リリィはそう言ってチョコレートを口に放り込んだ。

「そりゃ、[illegible]いいぎゃ。言い寄ってくる男を振ってたんだから」

「そうでありんす。ウチらには最初から誰も来ないでありんす」

人妖が騒ぎ立てる。

「うるさいなぁ。いつ世界が滅ぶかなんてわかんないから　好きな相手や仲間とけっ　てくらいさ

は」

リリィは醒めたことを言う。

「むぅ。いい男を見つけたら襲っとけばよかったぎゃ」

「それじゃただの狼でありんす……」

「吸血鬼みたいな女に言われたくないだぎゃ……。それより　何かやり残したことはないであり

んすか？」

ふとカンナが聞いた。

「そりゃあ　あるさ。塔の前でお前に聞いたろ？　死ぬかもしれないけどその覚悟はあるかって　さ

「そうだったぎゃ」

「それが……　どういう意味だったでありんす？」

「ボクは……戦って死ぬことを期待してたんじゃないかなぁ。もう最後なんだから　どうせなら派手に散

たいって　さ……　ところが　最後を迎えてみれば　毎日美味いもの食いながらだらだらしてるだけしかやる

ことがないのさ」

自嘲的にリリィは笑った。

「それも若さじゃな……。まぁ、わしが加わっても収まらんじゃろうが、誰もが英雄になれるわけではない。あきらめるときはあきらめるべきじゃな」

賢者は静かに言った。

「旅をやりたかったですよ、本当に」

「世界の終わりっていうのは、本当にそんなもんじゃ。静かに、少しずつ衰退していく。過去、いくつかの文明が滅んだときもそうじゃったらしい。じゃがな、もしかしたら、まだ最後じゃないかもしれん。まだ、あの勇者がなにかやってくれるかもしれん……」

「最後の希望、ですか」

リリィはつぶやいた。

○

一方、最後の役割を、彼女と過ごしている者もいた。

ヒロシとゆう子は並んで、砂浜を歩いていた。

「あんまり盛り上がらなくてごめんね……」

ゆう子が詫びた。

ヒロシは慌てて、首を横に振った。

「いやいや！　ゆう子ちゃんのせいじゃないって！　街やお店なんて開いてなかったし、話題も暗なりがちだったから……」

「うん……。だけど、変な感じだよね。もうすぐ世界が消滅しちゃうって……。消滅しないまでも、みんな死んじゃうって……」

ゆう子は海を見つめながらそう言った。

「だ、大丈夫だよ。死んでも死なないっていうか……。死後の世界があるんだって話じゃないか。だ、だから、ほら、死んでも……大丈夫……」

ヒロシはそう言ったが、その言葉はどうも感情がこもらなかった。

「それは清志さんから聞いてわかってるよ。でも、それって信じられる？　だって……よくわからなかったけど、結局わたしたちって、誰かが考えたお話の登場キャラクターかもしれないなんて……」

ゆう子は不安を隠せない様子でヒロシにすがる。

ヒロシはゆう子の体の重みを感じ、自分の言っていたことをやはり信じられないと思う。

「やっぱり変よね……。どういうことなんだろう？　この世界が虚構かもしれないって」

「そうだよね？　やっぱり、死んだら、死んじゃう……んだよね？　嫌だよ、そんなの」

「うん……」

ヒロシはうなずくしかない。

「それに　ヒロシ君は　けなちゃん……　隕石に連れて宇宙へ行くんだよね？　そうなったら　もう会えな
いって……」
「しょうがないよ。大事なことだもの。　うまくいったら　みんな復活できるかもしれないって
さ……」
しどろもどろになりながらもヒロシは言った。
しかし　そうは言いながらも自分でも信じられないことは信じられない。
「そんなわけないじゃない！　今だって　わたしは自分でものを考えてるし……。　わたしはわたし
だもの！」
ゆうなはヒロシの胸に顔を押し当てて泣いていた。
「だ……大丈夫だよ……。　ブレイブは……　俺は……　戦いが終わった後　自由にしていいんだ。　だから……
は　一人でも隕石を止めるよ。　宇宙でも活動できるんだ。　そのくらい……」
ヒロシの言葉に　ゆうなは顔をあげた。
「本当？」
「ああ　本当さ。　守るよ。　君を　笑顔」
「すごいね……　本当の英雄」
「安心して……　守るから……　守るから……」
ヒロシは繰り返した。

嘘をついているのか、本気なのか、あるいはこの場をうまく収めようとしているだけなのか、ゆう子が騙されてくれているのか……。ヒロシにはまるでわからなくなっていた。

それでも、嘘だけはしてはいけない。

そうヒロシは思った。

すると、一気に「死」というものが実感として襲いかかってきていた。何度も死ぬような目にあってきたはず

だが、今回のそれは今までの経験とはまるで違っていた。

「今夜……から……」

ヒロシはまた繰り返してから、ゆう子にキスをした。

○

「火の鳥の戦闘許可もらってきたよ。曽我兄さんなどを任に逃がすってので、今回はOKだ」

地球のマーライの一族の村にある伝説の会議に入ってくると言った。

伝説には、阿修羅だけがいた。以前、『火鼠の裘』を置いて、その世界のマニュアルを読んでいた。



「方法は？」
如月はマニュアルから顔をあげて聞いた。
『限定された状況』その場合の方法が一般に認められているわけじゃないからね。いや、私だって動けるかどうかわからない」
「動くさ」
如月の疑問の言葉を、仲井は遮って言った。
「え？」
「動くさ。先輩が命を張って守ってくれたものだものな」
「不二子がいなければ、これはザウンに壊されていた可能性が高い」
「確かに、ザウンが壊そうとしたってことは、相当の価値があるんだろうな」
「そういう言い方もできる」
如月はうなずき、この小型のパラボラ・アンテナ状の物体を改めて見つめた。
「動こうと動くまいと、何が起こるのかはやってみないとわからないんだけどね」
仲井は困ったね」というように首をかしげた。
「限定状況……か」
如月はつぶやく。
「あるとして、どんなところなんだろうね？」

「さて……私は実体を持たないんだ。この世界は虚偽として……それが自分の夢みたいなものなら、私の役目は世界にあるは
ずなんだけど……。それでも、やっぱりなかったらどうしようと思うね」
悪魔は力なく笑った。
「君もそう思うくらいじゃ、妖精に手を焼いても仕方ないな」
「買いかぶりだが……評価してもらえるのは嬉しいね」
悪魔はうなずいた。そして、どこか遠くを見て言った。
「善も悪もなさなかったものは、地獄に堕ちる資格すらないというが……私はどうなんだろうな？
少なくとも結論は出していない。さて、自分自身はどんな最後を用意してくれているのだろうかね……？」
「さて。でも、僕には、君はとても満足しなかった様子は見えないな」
妖精は微笑んだ。
「それに、自分自身がこの世界を作ったのであれ、僕は自我を持った一人。強い意志があれば、僕は世界に影響を与え
られるんじゃないのかな？」
「強い意志……か。それがたとえ自分のキャラクターであったとしても？」
「そうさ。きっと何か大きいものを動かすに違いない。そう信じないと、ここにいる価値がないじゃな
いか」
「強い意志が何かを動かす……か」
悪魔は何かに納得したようにうなずいた。そして、いたずらっぽく笑うと、妖精に顔を近づけた。

「ね、それなら、私の意思って奴を試してみたいんだけど」
「私の意思？」
「キャラクターの意思が、私の動作を動かせるのか……って」
彼女はそう言って、唇をつき出し、目を閉じた。
「おい、おい……」
純也は困惑する。
「[illegible]けなちゃんの意思が混じっているなら、ここで純也とキスなんかさせたくないよね？　だから、私の意思がそれに勝つかどうか、試すの」
彼女はそう言って、さらに唇を突き出した。
「え……ちょっと……」
「ごねないの。ほら！」
さらに彼女は促す。
根負けした純也は、唇を彼女に近づけ、キスをした。
ただし、頬に。
「むっ！」
彼女はうなった。
「ちくしょう。私の意思はここまでか」

彼は嬉しそうに言って笑った。

翌日、リリィのヨットの動力マナを使ってマーライの一族の村に送ってきたヒロシたちは、最後の旅支度を調えていた。

塔の外部にある監視鏡より、マーライの一族の長老は、燕の出発の具合を確かめている。

「集めるのは、なかなかなんだな、やっぱり」

残念そうにノニモラは言った。

「あきらめてもらうしかないね。そういう運命だ」

その場は、マーライの一族の長老ノニモラ、ヒロシの他、数人しかいない。

彼は悲しそう言った。

極秘任務である。以後、ここにけしかけながらやってくることも、国民には秘密にされていた。

「騙しているみたいで気が引けるでやんすね……」

ヒロシがマナスクリーンを見ながらそう言った。

ニュースでは、天界の人々が怯えている様子、帝国軍が古代兵器を破壊するために人々を集めはじめた様子が、交互に映し出されている。あくまで大気圏外からの攻撃で、古代兵器を破壊しきる、と帝国軍は主張しているのだ。

「すると、この後（のち）自決、このカプセルでステーションまであがって、そこで一休み……と」
「そう。そこで世界滅亡の様子を見てもらって……も、見てもらわなくてもいいけど、そこで降コールド
スリープしてもらってから『眠り衣装』で次の世界へ入ってもらう」
「その後（のち）のことは……誰もわからない、と」
「そういうこと」
波瀬がうなずいた。
「ノニモラ死ぬのは怖（こわ）くないぞ！　マーライ一族は生死を越（こ）える！」
ノニモラが恥（は）じながら言った。
「ありがたいことだ。それが何の犠牲ならいいんだが」
波瀬がうなずく。
「さて、そろそろ時間が……」
波瀬が時計を見た。
と、入り口が開いた。
白いドレスを着けながら入ってきた。
死装束というわけでもないだろうが、宮殿（きゅうでん）が保管している王家のドレスを着せられたらしい。
裾（すそ）が長くないという以外は、ウエディングドレスのようにも見える。
侍従（じじゅう）の老ころねが後ろに立っていたが、室内に入ったのを見届けると、老女は何も言わずに後ろへ下がった。

「綺麗(きれい)でやんすね」

「うん」

ヒロシと阿九斗はうなずきあった。

けなはそういうひらひらした服が嫌(きら)いだったから それを着ているということは 彼女なりに

はしているということだろう。 顔を見ると うっすらと化粧(けしょう)までしていた。

「みんな……」

何か言いかけて、けなは黙(だま)り込んだ。

が 誰もその先の言葉を発しなかったことを気にせず カプセルへとけなを促した。

けなも黙ってカプセルに乗り込んだ。

その 扉(とびら)を閉める前に ようやくけなは声をあげた。

「みんな! これで終わりじゃないから! お別れじゃないから!」

[illegible]はわかるのだ というようにけなは声を振り絞(しぼ)った。

「わかってるさ」

[illegible]ノ二モラは微笑んだ。

それでもカプセルは名残(なごり)を残さずにバタリと閉まった。

ヒロシはブレイブスーツを装着し 『[illegible]』を[illegible] 抱いたころねを背負(せお)うと 阿九斗はうなずいてみせた。

阿九斗はカプセルを抱(かか)え上(あ)げると 塔を登るべく宙(う)へ浮かび上がった。

ノニモラと満恋が手を振る。

それに手を振り返すかわりにうなずいてみせた。

阿丸ブレイブはカプセルを持ち上げたまま搭乗し、蒼空へと飛び出した。やがて大気圏を突破すると、LEO

にマナを操作し、推進ブレイブの方向制御へと移行した。

そして、もはや放棄された国際宇宙ステーションにエアロックを開けて入ると、そこに『の燃料』を安置した。

ステーションは日本実験棟のもので、数人が作業するスペースしかないが、阿丸の四人が詰めるには十分な広さがあった。窓からは

が、もうその力。窓からは、虚空を突き進んでくる隕石が小さく輝いて見える。

自爆装置があるのを確認してからカプセルを開ける。

「なんか……あたしたちだけ生き残っちゃって……申し訳ないよねぇ……」

けいなはそう言った。

「とはいえ、それが最良の選択です。覚悟を決めてください」

ころねは、分身が寝るための布団をポシェットから取り出した。

ポシェットの中は四次元空間になっている。それも地球の重力に依存している以上、今機能していても、地球が崩壊すれば使えなくな

る。これがころねの出す最後の道具ということになりそうだ。

「なんで……田中……？」

阿丸が聞く。

「相手が死亡を見たとき、分身が言いつけに従っていなければ……。これは、特殊な繊維を使った手ぬぐいです。これに入って、を仕上げれば、一年程度は鮮度を保ってくれるでしょう」

「そうなのか……って、鮮度？」

ころねの答えに、半ば呆れながら聞き返す。

「……鮮度大事。まぁ、だじゃれです」

そんなやり取りをしている間にも、障子の向こうで大きな存在が占めはじめていた。

「ああ、もうすぐなのか……」

ヒロシがつぶやくと、ころねがヒロシの横腹を肘でつついた。

「？」

疑問の目をヒロシは返す。

すると、ころねは布団に寝転がって言った。

「今日は寝ます。それでは、また来世」

それで、ヒロシも察した。

「ああ……それじゃあ、アニキ。あっしはいっちょやることがあるんで」

「やること？」

「はい。ちょいと無理も限界まで攻めてきます。どうせ死ぬってんなら、悔いのない方がいいでしょ？」

それだけ言うと、ヒロシは振り返らずエアロックを抜けていった。

かく、プシュ、という音を出して、すぐに静寂がやってきた。
もっと刹那を惜しむこともできただろうに、と阿弥陀は思ったが、ヒロシは残り少ない人生を強く信じることができているのだろう、と自分に納得させた。
「さて……」
自分が準備しなければ、と阿弥陀が動き出すと、それをけなが呼び止めた。
「ねぇ、あちゃん」
「なんだい？」
ひょい、と阿弥陀は振り返る。
けながうつむいた格好でそこにいた。
「そんなに心配することはないよ……」
阿弥陀がそう呼びかけたが、けなはいきなり、ぱっ、と顔をあげた。
その顔は赤くなっていた。落ち込んだり、悲しんだりしている様子はない。
「ど……どうしたの？」
「ね、ねぇ……」
けなはそう言って、もじもじと身をよじった。何か言い出しそうにはしているが、結果は出てこない。
「だ、だから、大丈夫かい？」
もう一度問うと、けなはようやく話し始めた。

「もう、最後、とは思いたくないけど、きっと長いこと眠るんだよねぇ？」

「そうだと思う。もしかしたら……すぐに目覚めるかもしれないけど」

阿見はうなずいた。

「寝ている間のことは覚えていないのかな？」

「きっとそうさ。経験的には一年後も一晩寝たくらいのものじゃないかな」

「それじゃあ、大丈夫だよねぇ。あーちゃんが起こしに来てくれるんだよね？」

けーなは阿見の目を見つめて言った。

阿見はけーなを安心させようと、優しく答える。

「きっとさ」

「うん……じゃあ、安心して寝るね……でも、約束してくれる？」

けーなは首をかしげる。

阿見は戸惑いを目に浮かべた。

「約束なら……さっきしたさ。大丈夫、帰ってくるよ。何処に行くのかはわからないけど……」

「違うの。約束して…今…」

けーなはまたももじもじしはじめた。

「何？」

「…今…結婚しよ」

「けっ……こん……？」
いきなりのことに阿知花は驚く。
「そ、そう。だって、って最後ってわけじゃないっていうけど、最後かもしれないんだし、って約束ていう
か、ほら……ね？」
けなは目丹なり、無理作った笑顔を浮かべた。
「う……その……ねぇ……」
阿知花は否もどうにもならないほどにうろたえていた。
「ダメ……なの？」
けなが顔を曇らせる。
「いや、ダメとかそういうんじゃなくって……」
「じゃあさ、やっぱり……ほら……！、今日白ドレスだし……。あちゃん、ノニモラちゃん
と……その……あんな形だけど、ちゅーしちゃったし……」
けなは、そう言ってばたばたと手を動かしはじめた。
「ほ、本気なのかい？」
阿知花はそう言って、激しく動いているけなの手を軽く握った。
「う……うん。本気」
けなは急にしおらしくなって、うつむいた。

「そういうことなら……いいよ」
「ホント!?」
けながぱっ、と顔を明るくして兄を見上げた。
「ああ……本当だけど……その……どうやったらいいんだろう?」
兄の困惑に、けなもきょとんとした顔をする。
「そ、そういえば、どうやるんだろうね」
「そりゃあ、まだ知り合いのほとんどが結婚するような年齢じゃないから、参列したこともないよ」
「ゆ、指輪か、はめてくれるんだよね、確か?」
「い、いや、でも、もちろん指輪なんか持ってないし……」
兄は困惑する。
「それじゃあ、さ……」
そう言うや、けなが兄の胸に飛び込んできた。
「え……」
兄はその重みによろめくと、けなは兄の顔を下から見上げて、切なげに唇を震わせていた。
「兄ちゃん……」
そう言ったきり、けなは黙り込んだ。
ゆっくりと目を閉じていく。

典丸　さすがにその意味を理解した。
けなを抱き寄せ、ゆっくりと顔を近づけ、静かに口づけた。





○

『お休みなさい』扉が閉まった。窓の向こうでけいなが小さく手を振っていた。

祐也も手を振り返す。

係員の指示に従ってスイッチを入れていく。ガスがカプセル内部に噴き出した。

窓ごしに見えるけいなの顔が段々見えなくなっていく。

けいなはガスを吸い込んだのか、すぐに眠ってしまったが、祐也は顔が見えなくなるまで手を振り続けた。

やがて、コールドスリープ完了のサインが表示された。

祐也はそれを見届けてから、カプセルを離れた。

「さて……」

ひとりつぶやいて、部屋の隅に置いておいた『親機』を用意した。アンテナの付いた部分を立て、スイッチを入れる

という手順があるらしい。

「祐也くん」

後ろから声がした。

「え？」

振り返ると、ころねが身を起こしていた。

「先程（さきほど）はお楽しみでしたね」

「こ……こら……そういう事は言うものではない、だろう……。寝なかったのか。趣味（しゅみ）が悪い」

阿見比はばつが悪そうな顔になる。

「失礼しました。人類がどのように滅（ほろ）んだかの証拠になろうと思いまして」

「そりゃあ……確かに、誰（だれ）かが語ってくれると面白（おもしろ）いかもしれないね」

阿見比は、呆（あき）れながら言ったが、考えてみれば、それも面白いかもしれないと思えてきた。

「それじゃあ、後は頼（たの）んだよ」

「はい」

ころねはうなずいたが、ふと、何かに気づいたように阿見比に言う。

「あの……今日はしてくれないのですか？　キス」

「……それ、本気で言ってる？」

「冗談（じょうだん）です」

「だろうね」

阿見比は笑った。

そして、一人、火鼠（ひねずみ）の裘（かわごろも）の前を立ち去り、スイッチを入れた。

無念、阿見比の姿が消えた。

ころねは心の思いを外に見た。

もう、ここには誰もいない。自分が駆動音（くどうおん）を立てるのをやめてしまえば、完全な無音になるだろう。再度

とせば、誰かが起こしてくれるまで、稼働停止状態を保持していられる。その際、マナ分子を止めていれば完全な停止状態

ろうし、そうでなくても、電力さえあれば、データを取り出し再起動できる。

最後にころねは、神へアクセスしてみた。神は、特に感慨（かんがい）はないらしかった。

《ただ役目を果たせなかったのみ。すべては消えゆく》

それが神の最後の言葉だった。

何を聞いても、もう答えることはひとつだった。

《すべては消えゆく》

意味のない言葉、と、ころねは思った。

しかし、自分だけなら、何もしなければ消えずに保存される。少なくとも千年

「すべてが消えた後に何が残るのでしょう？」

ころねはつぶやいた。

少なくとも、自分のデータは千年を超えても存在しているはずだ。

それとも宇宙そのもの、がけなの、死とともに消えるのか……。

答えはどこからも返ってこなかった。

「神にとってのすべては消えゆく」

そう言って、の怠外見え。

そう、神にとってはすべて消える。

自分はネットワークの端末のひとつに過ぎない。神のように自我が生まれたわけでもない。

隕石は、もはやその巨大エネルギー流でくっきりと見えるほどに接近していた。この位置から見ると、その大きさは地球の半分ほどにも見える。実際は、それほどでもないのだろうが、それを見れば地球も破滅に迫っていると思った。

隕石は石ではなく、エネルギーの塊のようだった。ただ熱せられた流体が渦を巻いて形状を保っているかのようだ。

そこに通信が入った。

ヒロシからのものだった。

《ころねちゃん……聞いてる？》

「はい」

ころねは答えた。

《今から、隕石を止めてみせるから……》

「その可能性はゼロです」

冷淡にころねは言った。

《わかってるけど…… そうはっきり言うこともないんじゃない？》

「いえ…… わかっているなら やめておけば良かったのでは？」

《そうはいかない。 約束したんだ》

「約束ですか ですが 最終回ですよ？」

《知ってる…… だけど 最後の時は誰かに聞いて欲しくて》

「わかりました。 お話しましょう」

《今からプラズマ球を出して突っ込む 見てるかい？》

「見てます」

ころねが視界をズームさせた。 限界距離 小さな爆発が見えた。 それがヒロシだった。

《行くぞ！ 行くぞ……って こういう時なんて言ったらいいのかわかんないや…… そ……

の…… うわぁぁあ とか叫ぶべきなのか？ 何か…… 何も思い浮かばない……》

「ヒロシさん」

《何？》

「少なくとも 最後はあなたは勇者でしたよ」

《ありが…… あ…… うわ……》

通信は雑音だらけになった。

ヒロシの発した光は、無限のまま無限に発光する光に飲み込まれた。
ころねは、小さく「さよなら」と言った。
暗闇はさらに地球に接近した。
暗闇の一部は、竜巻のように地球に伸びていき、地球の表面を巻き込んでひとつの渦になった。
地球上から見れば、それはかつて大和望一郎が見た破滅の風景そっくりだったに違いない。もしかしたら、その渦の中心は、黒い太陽の神秘的な姿を見たのかもしれなかった。
しかし、その渦はすぐに意味を失った。暗黒の無限は地球の表面に接触し、地殻をミルククラウンのごとくに周囲に吹き飛ばしたからである。
ころねにとっては、無限の世界が広がった。しかし、そのめくれ上がった地球の中心、夜明けの太陽が巻き込まれているであろうことは想像に難くなかった。
爆発の中心は地球の大気と水を吹き飛ばして膨れあがり、生きているかのように脈打った。
地球の表面を、衝撃波が伝わり、衝突点から反対側へと抜けていく。その後から、やや遅れて、地球の海水が巻き込んだ波が追いかけていく。
その波が過ぎていくと、その部分の地表は見えなくなり、煮え立つ海面だけが、煙の向こう側に覗くのみとなっていた。
「かくて終わりの来たりぬ……」

ころねは一詩も読んでみようかとデータを探ったが、それはネットワークの上のものだったため
すでに失われていた。地球も人間もとうに死に絶えたのだった。
「そんなこんなで世界は終わる」
ころねは自分の言葉で言い換えた。
「静かに、音もなく、どかんと」
そして、ころねは地球が完全に煮えたぎったマグマと水だけの液体に化してしまったのを確認してからただ
に潜り込んだ。
「それでは、みなさま、おやすみなさい」
誰ともなく言うと、ステーションの電源を消した。



6　リンボ

服部絢子の記憶は、断片化してはいたものの、はっきりとしていた。

あの色のない炎に焼かれたのは、憶えている。

灼熱とも激痛ともつかない、恐ろしい感覚がよみがえる。肉体的なそれよりは、精神的な恐怖が絶え間なく押し寄せてくるような、あの地獄の中に確かに自分はいた……。

しかし、今その感覚は記憶の中にしかなく、身体には異常がなかった。

服部は、服を着た姿で立っている。

波が、足下に打ち寄せては返している。

……海だ。砂浜だ。

周囲を見回してみる。

ここは、どこかの湾内、どこかの浜辺としか言えなかった。岩山が切り立っているところが短い砂浜。その右端に岩だらけの岬があり、後方は熱帯のジャングルになっている。そして、左手は巨大な、切り立った崖になっていた。

その崖が尋常ではなかった。

上を見上げてみる。

その崖は、どこまでも高く続いていた。雲を突き破り、視界の果てまで。

――ありえない。

そう結論付けた。

この世界そのものが異世界でなければ、ありえない景色だった。

その断崖は、高さも長さも永遠であるかのようだった。少なくとも視界の果てまで続いている。しかも、そ

の断崖は一定の速度で海に向かって崩れているのだった。まるでブロックが剥がれていくかのよう

に、あるいはCGのポリゴンデータが消えていくかのように、断崖はぽろぽろと崩れて海へと落ちて

いく。それでいて、断崖の高さはまるで変わらないのだ。

――無限に湧いてくる……断崖……なのか？

純白の雲を突き抜けて、遥か天空まで続いている崖を前に、じんわりとした恐怖感がはじめていた。

加えて、さらに恐ろしいことに気づいた。

見上げた空は、暗かった。

太陽はなく、雲が暗く、重く、天にのしかかっていた。

普通、曇天でも太陽の位置はある程度はわかる。この世界には太陽がないのだ。

それでも周囲が見えることは不思議だった。

昼間の雲の間といった程度の視界は利く。

――[illegible]

そういぶかしんで、海を見てみる。

しかし、現実世界の海特有の潮の香りはそこにはなかった。そこが現実世界ならば、波がどこかわざとらしいほどの一定テンポで押し寄せてきているはずなのだが……。

——死んだ……？……私……が？

まさか、ここが死後の世界というものではないか、と納得し思い始めた。

じんわりとした恐怖が、さらに身体全体を侵食しはじめる。

——だ、だとしても……なぜ、私はここに一人でいるんだ……？

不安を紛らわそうと、論理的に考えてみる。ここが死後の世界なら、一人でいられるはずもない。もっと沢山の

が同時に死んだはずなのだ。

——と、とりあえずどこかに行かねば……。

歩き始めてみる。普通に歩くことはできた。砂を踏み、音がする。

海岸の方は何も待ちそうもない。すると、ジャングルに入る以外に道はないらしい。

ジャングルは、鬱蒼と木々が茂り、先は見通せない緑の壁だ。そこしか行く先はないにせよ、何が起こるかわ

からないという点での恐怖感がある。

——阿久斗……。

不安になると、その名をつい思い出してしまう。しかし、ここで会えるはずもなく、ただ虚しさが

すばかりだ。

自然と涙（なみだ）があふれてくる。頬（ほお）を伝いはじめた涙をぬぐって、前を向いた。

――まだ意志があるってことは、死んでないってことなはず……。

それならば、歩き続けていれば、どこかには到着（とうちゃく）するのだろう。

ジャングルに向かって歩き進めた。

と、その時だった。

背後で物音がした。

ぎょっとして、綿矢は振り返る。

そこには、海から這（は）い上（あ）がってくる一つの姿があった。

「ひ……！」

悲鳴をあげて綿矢は倒れた。

その人物は、遭難（そうなん）してたった今、浜辺に打ち上げられたという様相だった。

――そんなの、今まで見なかったぞ……。

綿矢の見逃しということもあるまい。その人物は、その数瞬（すうしゅん）前そこに現れたとしか思えなかった。

木を杖に立てて、ふらふらとその人物は起き上がった。

自分と同じ男である。

ふと、彼（かれ）は顔を起こした。髪（かみ）の毛（け）が額に張り付いていたが、その顔を綿矢は見間違（みまちが）えようもなかった。

――まさか……。

疑いで声を出すのが遅れた。
先に彼の方が絢を見つけて声をあげた。
「……絢……！」
その声で、絢は確信を持った。
「……阿礼……！」
絢は、思わず阿礼の方へ駆け寄って行った。
「会いたかった……やっぱり会いたかった……！」
そう言った阿礼に、絢は飛びかかるように抱きついた。
「阿礼っ」
絢の勢いそのまま、二人は海へ倒れ込み、大きな波しぶきを打ち上げた。
「うわぁあん！　阿礼っ！」
普段は気を張っている絢が、このときばかりは素直に泣きじゃくる。
しかし、その様子を不審に思ったのか、阿礼は自分の胸に顔を押し当ててくる絢の顔を起こし、怪訝な顔で聞いた。
「……君、巫女の絢」
「な……彼女！　お前こそ巫女……！」
絢はそう言い返してから、巫女が怖くなったのか、阿礼からすごい勢いで離れ、波打ち際で構えた。
「ほ、巫女……阿礼なんだろうな！」

その有様を見て、阿礼は笑い声をあげた。

「あははは……その有様や、妊婦みたい」

阿礼が腹を抱えているのを見て、綺礼は疑いの目を恥じらいの目にだんだんと変化させていった。



「ば、馬鹿っ！　通報されるだろ！　こんなところで！　純子が来るはずがない、奴が来たら！」

「そりゃあ、そうだ。犯罪になるのもわかる。最初から無警戒で飛び込んできたことはおいておいて……」

美和は、まだ笑っている。

「ち……畜生！　なんたる屈辱……。お、お前それでも人物なんだろうな！」

純子は、美和を指さす。

美和は、笑うのをやめた。

「ああ、たぶん。僕も君も人物だって。ここは死後の世界なんだから」

「ええ？」

純子は、驚愕した。

ヒロシ自身は知るよしもないが、美和が純子と出会っていたのと同じ頃、彼もまた人の森の中にいた。

――まったく、嬉しくないというか……。この別の世界に飛ばされたって、嬉しいわけがあるかも……。

ヒロシはそう思う。

死後の世界とはいうが、こちらの世界も死の危険があるんじゃないか、という不安感

「そもそも、どうしてスーツを着ているんだろう？」

自分の姿を見て、思わず独りごちる。鏡があるわけじゃないが、自分の目の前にはバイザーがあり、左手を見ればブレイブのそれだ。

しかし、スーツが機能しているとはとても思えない。飛行も、攻撃も出来なかったし、そもそもがバイザーの内側のモニター、ステータスランプが光っていないのだ。それでも、外が見えているし、動きも支障なかった。

バッテリーが切れると、通常のスーツも重いはずなのだが、死んだときの姿のままにここに来たとは考えにくい。もしかしたら、自分の死後の世界は、自分のイメージする姿のまま来られるのかもしれない。

――そうだとすると、こちらで人に会えるかも、と思った通りになるのかも……。

しかし、この森の中は、人影は見あたらない。そもそも死んだ人に会いたい人がいるかというと、思いつかない。

そうこう考えていると、森を抜ける道を見つけた。細い、獣道に見えるが、その先は次第に木々が薄くなっており、どうやら人が通っているようだ。

――すでに死んでいて……会いたい人、ねぇ？

ヒロシは思い悩む。

と、一人の男の顔が、脳裏に浮かんだ。

――そういえば……。

そう考えたとき、すでにその男はすぐ近くにいた。

「こんなところで出会えるとは……」

落ち着いた声がした。

道の先、切り株があり、それを椅子にして一人の男が座っていた。

「大和・望一郎……」

ヒロシはつぶやいた。

彼こそ、自分にブレイブスーツを与えた男であり、かつてCIMO8を組織した敵として、[illegible]そして、今になって思えば、かつてないほどにこの[illegible]を知り尽くしている人物でもある。

「[illegible]君」

望一郎はそう言った。

彼はいつか見たことのあるスーツ姿で、この場にはふさわしくない余裕のある笑みを浮かべていた。この場にふさわしくないと感じたのはどういうわけかわからないが、[illegible]ヒロシにとって[illegible]に入らないところが、その笑みだったということなのかもしれなかった。

「そういえば、ゆう子さんも死んでいるはずじゃないか」

ヒロシはそう言った。

どうもそれを忘れていた。そうでなければ、[illegible]なくてもよかったはずだ。どう[illegible]てこちらを先に思い出してしまったのか。

「それは無理だった。だが、こちらだって男の言いたいはずがないだろうとはわかって欲しいものだね」

ヒロシの一言だけで何が言いたかったのか理解してしまう知人の取った物言いがカンに障ったが、一部分はそういえばこういう男だった。

とはいえ、ヒロシもこの言い出しには当時的に何かを感ずにはいられなかった。

「観測世界の理屈ってことはわかってるわけだ」

ヒロシは聞いた。一部分はすべてわかっているといった態度だったからだ。

「こちらでは、先輩にあたるからね。とはいえ、私の感覚で言えばすぐ先ほど来たところだ」

「先ほど？」

ヒロシはいぶかしんだ。精神時間の一部分が流れ方から流れているはずだ。

「そう、先ほど。こちらでは時間の感覚が違うとでも言おうか」

「それは、そうであってもおかしくはないけれど……。だったら、どうしてこっちが何が

だってわかったんだ？」

「CIMO8は、世界のあらましについては深いところまで把握していたからね。そもそも、ザ

ワンを一部分していたんだ。大体のところはわかってる」

言われてみれば、ザワンは一部分をスカウトしたに決まっている。

「じゃあ、能力の力その他についても理解していた……？」

「最初からね。だが、そもそも君たちは私の言うことはまるで聞かなかったからね」

一瞬、寂しい笑みを浮かべた。

「信じられることじゃあなかったさ。あのときは」

ヒロシにも後ろめたいところはある。言葉を濁すようにそう言った。

「こちらも責めているわけじゃない。もっとも、次元転移できないとわかっていたから裏で動いていたわけだが」

「とはいっても、ザウンは人類を滅ぼそうとしていたようだけれど……」

「そんな腹の内はわかっていた。だからこそ先に儀式を行うべきだったのだ」

「一部の人間が行おうとしていたのは、宇宙創世の契機だった。それが人類を精神体にして他の宇宙へと逃がすということを意味していたのは、時空転移できなかったが、今後の足掛かりがあると認識できる」

「でも、それは失敗に終わって……」

「それを言うなら、我々の世界も生き延びて移動しきているのが不自然。だが、結局すべて精神体の力に吸収されてしまう。人類はすべて消

だのなら」

「じゃあ、我々の世界もあるから安心ってわけでもないんだ」

「人類の道は、行き着くところふたつしかない。消滅して精神体の力となって他の宇宙に利用されるか、自ら精神体となって他の宇宙とシフトするか」

「でも、他の道もあるかも……」

ヒロシは思わず言い返したが、きっぱりと一郎は首を振った。

「私が時間を巡ったと思っているんだ？」

その言葉は、かなりの重みがあった。

しかし、どういうわけか、ヒロシから反論の言葉が口をついて出てきた。

「でも、アニキなら……」

「何だって？」

一郎が視線を鋭くした。

ヒロシは狼狽しながらも、反論を止める気にはなれなかった。

「でも、アニキなら……もっとうまくやれるんじゃないかって……」

苛立ったように言うと、一郎は首を横に振った。

「そう見えるのは、別の時間軸の彼が選んだからに他ならない」

「彼が選んだ？」

「時間軸は、別の選択結果を選んだ……つまり、結局どうあっても記されたことから逃れることはできない。だから」

「それは、私の時間軸が失われ、世界が分岐を繰り返す……すなわち、他の人の宇宙へとシフトする道を選んだのだ」

「じゃあ、第二の道はないってことに……？」

戸惑いながらヒロシは問う。

一郎はうなずいた。

「ない。そもそも、この異世界転移が起こったことを考えてみたまえ。なぜ私たちが出会った？ それは
とって都合が良いからではないのか？ 何かそこに物語的都合を感じはしまいか？ 君が言ったアニキ……
は、人の欲望が生み出す物語を嫌っていたが、異世界をめぐる物語は全て復讐という因果を果たしているのではないのか？ そ
こから逃げることができるのか？ 私たちは、この物語の異世界ですら、何かの因果律に制御されているに過ぎない。ど
うやって、私たちは決定された物語から、そして無限に続く物語から脱出できるのだ？」
その口調も、内容も、反論しようがなかった。
「でも、時間を越えられれば……」
ヒロシは、妙に悲観的になっていた。
「この世界の時間も、人間の運命と同じように、いや、物語のように、因果律を持っていると言っていいだろう。それは、結局さ
ている物語の因果律と世界は違う。だからこそ、時間を越えることが可能なのだが、その因果律を持つ物語もある。つまり、いくら修正しても、も
に引き戻されてしまうということだ」
噛んで、含めるように、一語一語区切って言った。
「でも……」
ヒロシはそう言いかけて、どうして自分がそこまで時間の道にこだわっているのか、その理由に
と思い当たった。
自分自身も、作者という因果律に、納得しているわけではないからだ。
「……とにかく、時間を越える方法だけを教えてくれればいい。そうすれば……後は……」

その先の基本的外から出てこなかったが、ヒロシは一回会いに出たことを、自分自身で体験したいと強く思っていた。

「その後？」

冷たい声で伸郎は聞いた。

「オレが……何時か必ず、この物語から抜け出てみせるさ」

低く、しかし、決然とヒロシは言った。

あとがき

ご無沙汰してしまいました。水城正太郎です。

半年ながらくお待たせしてしまい申し訳ありませんでした。本作を期待って買ってくださった皆様は、半年の
しかありません。

実は前巻脱稿後、パニック障害、それからくる鬱病に悩まされており、一時期は外出など出来ない状態と
りました。「サブカルは年齢を重ねると鬱になる」という格言がありますが、まさにその通りになっ
てしまったわけで、新たな世代の瞬間に立ち会ってしまった結果です。
とはいえ、病状はそんなに深刻なものではなく、外出時の、電車やバス、すべて乗れないという状態でして、
も慢性的な睡眠障害と頭痛と肩こりに悩まされていました。というか、今も睡眠障害と頭痛と肩こりがありま
す。そんなわけで、完治には至っておりませんが、今後はなんとか執筆は出来そうです。今後とも応援くださ
れば、ますます作品も戻ってくるかと思います。勝手ながらよろしくお願いしたいと思います。
なお、お手紙などは、それ以前に書かれていたものか、言い訳はないものの、の山積みとなっておりま
す。決して作品を放棄していたわけではございませんので、ご了承くださいませ。なにか
い訳めいてしまいましたが、以上もちまして、刊行遅延のご説明とさせていただきます。

さて、ともかくも物語はクライマックスとなりまして、残りあと二話程度となりました。結末の完成はいきませんので、もしかしたらお待たせしてしまうかもしれませんが、最後までおつきあいくだされば幸いです。

それでは最後まで閲覧してくださった全ての皆様、本当に心からの感謝を。ちょっと申し訳ないご迷惑をおかけしてしまいました。特に担当の編集様、伊藤宗一(いとうそういち)様は、本当に申し訳ありません。不甲斐(ふがい)ない作者を見捨てないでやってくださいませ！

ラストまでもう少し！、皆様よろしくお願いいたします！

◆ご意見、ご感想をお寄せください。……ファンレターのあて先◆
〒151－0053
東京都渋谷区代々木2－15－8
(株)ホビージャパン　ＨＪ文庫編集部　気付
[illegible]

PROFILE

水城正太郎　みずきしょうたろう

『東京タブロイド』シリーズ（富士見ミステリー文庫）、『せんすいかん』シリーズ（ＨＪ文庫）。
『ホビー・データ』を経て、現在ライター集団『A－TEAM』主催。
体調によりあまり動けないので、下らない映画ばかり見ています。「人間ミンチ」は本気で下らないので、そっち系のマニア以外にはお勧めしません。ホントひどいんだよ。

伊藤宗一　いとうそういち

兵庫県在住のイラストレーター兼漫画家。
一般向けから成年向けまで幅広く活動中。
好物は、熱血・筋肉・萌え・エロ・爺。
<一言>
物語はいよいよ佳境に入って盛り上がって来ました。
オリジナル展開有りのコミックス版「いちばんうしろの大魔王」も負けずに頑張ります。よろしくお願いいたします。

HJ文庫

いちばんうしろの大魔王 ACT12

2012年10月1日　初版発行

著者―― 水城正太郎

カバーイラスト―― 伊藤宗一　　装丁―― 西村 大

発行者―松下大介
発行所―株式会社ホビージャパン　〒151-0053　東京都渋谷区代々木2-15-8